諫早市文化財調査報告書 第３集

平山遺跡Ｂ地点

みはる台小学校建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

１９８１・３

諫　早　市　教　育　委　員　会

序

このたび，平山遺跡Ｂ地点（みはる台小学校用地）の埋蔵文化財発掘調査報告書を発刊することになりました。

これは昭和54年に発掘調査を実施したものです。

諫早市立土師野尾小学校の校舎が老朽化し，新校舎を建造することになり，当時，教育委員会としても地元関係町としても，今までの用地に建造するか，他の場所に移転をして建造するか，数多くの論議がなされ，その結果現在のみはる台小学校の所に決定いたしました。ところが，この附近一帯は埋蔵文化財の包蔵地として周知されており，直ちに県教育委員会と協議を持ち，かつ指導をいただき，発掘調査を行ったものであります。

地下の埋蔵文化財は私たちが祖先から受けついだ遺産であり，これを後世に損わないで残し伝えることこそ，文化財保護の大原則であると存じます。しかし一方開発事業のため，どうしても発掘調査を実施して遺跡を記録として保存をすることを余儀なくされることも少くありません。

この報告書は，こういう意味で発刊いたしたものであります。各界の学術研究の資料として役立つならば，幸甚と存ずる次第であります。最後に，この発掘調査にあたり，ご指導いただいた県教育委員会をはじめとし，ご協力をいただいた，地元関係町の方方に心からお礼を申し上げます。

諫早市教育委員会
教育長　西　原　英　麿

例　　言

1．本書は，みはる台小学校建設に係わる平山遺跡Ｂ地点の発掘調査報告書である。

2．遺跡は，諫早市栗面町に所在する。

3．発掘調査は，試掘調査を長崎県文化課により昭和54年４月９日から４月28日まで実施し，本調査を諫早市教育委員会により同年７月13日から９月21日まで実施した。
なお，試掘調査を第一次調査，本調査を第二次調査として以後記述する。

4．遺物整理は，諫早市教育委員会において行った。

5．遺構の実測及び写真撮影は，秀島貞康，渡邊康行が行い，遺物の実測，写真撮影，トレースは秀島が行った。また一部は高野晋司氏の協力を得た。

6．本書の執筆は，Ｉを松尾誠，Ⅲ－１を高野，他を秀島が行った。

7．出土遺物は現在諫早市教育委員会が保管している。

8．この報告書で使った高度値は海抜高である。また方位は磁北である。

9．本書の編集は秀島が行った。

10．発掘調査及び遺物整理，報告書作成にあたっては長崎県教育庁文化課および古賀力，宮崎貴夫，永松実，稲富裕和氏の指導および助言を得た。記して感謝の意を表する次第である。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査にいたる経緯 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 3
第Ⅲ章　第一次調査 …… 5
　第一節　第一次調査の概要とその結果 …… 5
　第二節　第一次調査の出土遺物 …… 9
第Ⅳ章　第二次調査 …… 11
　第一節　調査の方法と経過 …… 11
　　1　調査の方法 …… 11
　　2　調査の経過 …… 11
　第二節　層　　位 …… 13
　第三節　遺構及び遺物 …… 15
　　1　遺物の分布状況 …… 15
　　2　土　　壙 …… 20
　　3　集石遺構 …… 22
　　4　石　　器 …… 24
　　5　土　　器 …… 30
　　6　その他の遺物 …… 33
第Ⅴ章　ま　と　め …… 34

挿　図　目　次

第1図　平山遺跡B地点の位置及び周辺遺跡分布図 …… 4
第2図　遺跡附近地形図，第二次調査グリッド配置図及び発掘区域図 …… 6
第3図　第一次調査グリッド配置図及び発掘区域図 …… 7
第4図　C・D－2 G.遺物出土ドット・マップ …… 8
第5図　D－2 G.土層断面図 …… 8
第6図　土器拓影及び実測図 …… 9
第7図　石器実測図 …… 10
第8図　L－10 G.土層断面図 …… 13
第9図　5－6列土層断面図 …… 14
第10図　遺物分布状況図 …… 15
第11図　H－5 G.土器出土状態実測図 …… 17
第12図　H－6 G.土器出土状態実測図 …… 18
第13図　H－8 G.土器出土状態実測図 …… 19
第14図　土壙実測図 …… 21
第15図　E－10 G.集石遺構実測図 …… 23
第16図　石器実測図(1) …… 25
第17図　石器実測図(2) …… 26
第18図　石器実測図(3) …… 27

第19図　石器実測図(4) …… 28
第20図　土器実測図(1) …… 31
第21図　土器実測図(2) …… 32
第22図　小玉実測図 …… 33

図　版　目　次

図版１　１．平山遺跡Ｂ地点遠景（北側から）
　　２．平山遺跡Ｂ地点近景（北側から）
図版２　１．第一次調査Ｄ－２Ｇ.遺物出土状況（東から）
　　２．Ｃ・Ｄ－２Ｇ.遺物出土状況
　　３．調査風景
図版３　１．Ｄ－２Ｇ.土層断面（北壁）
　　２．第一次調査出土遺物
図版４　１．Ｌ－10Ｇ.土層断面（南壁）
　　２．Ｌ－10Ｇ.土層断面（西壁）
図版５　５・６列土層断面（北側から）
図版６　１．Ｅ－５Ｇ.石器出土状況
　　２．Ｈ－５Ｇ.石器出土状況
図版７　１．Ｈ－５Ｇ.土器出土状況
　　２．Ｈ－５Ｇ.東側高杯
図版８　１．Ｈ－５Ｇ.東側高杯除去後
　　２．Ｈ－５Ｇ.西側高杯
図版９　１．Ｈ－６Ｇ.土器出土状況
　　２．Ｈ－８Ｇ.土器出土状況
図版10　１．Ｈ－８Ｇ.土器出土状況（南側集中部）
　　２．Ｈ－８Ｇ土器出土状況（北側集中部）
図版11　１．１号土壙土層断面（南側から）
　　２．１号土壙掘り上げ後（南側から）
図版12　１．２号土壙土層断面（南側から）
　　２．２号土壙掘り上げ後（南側から）
図版13　１．Ｅ－10Ｇ.集石遺構（東側から）
　　２．Ｅ－10Ｇ.土壙（石材除去後）
図版14　１．ナイフ形石器，台形様石器，石核ほか
　　２．剥片および砕（屑）片
図版15　１．削器ほか（正面）
　　２．同（背面）
図版16　１．石鏃，ｕ－ｆほか（正面）
　　２．同（背面）
図版17　１．二次加工のある石器ほか（正面）
　　２．同（背面）
図版18　土器および小玉

第Ⅰ章　調査にいたる経緯

諫早市立土師野尾小学校の校舎の老朽化により，校舎改築についての検討がなされて，地元土師野尾・平山両町でも関心が持たれるようになった。

諫早市教育委員会としても建築計画にかゝり，昭和56年４月開校を目指して年次的に工事着工することとした。

一方，建築用地の問題が検討された。現在校の場所に改築すべきか，若しくは他に適地を求めるべきか，論議が交された。結果としては，現在校の場所は校区制の一部変更と基準面積狭少との理由により不適であるとの結論が出され，現在校の外に転出，建築することになったのである。

昭和53年５月，教育委員会は，土師野尾・平山両町により提案された三ヵ所の候補地について地元と合同の実地調査を行い検討を重ねた結果，現在の「みはる台小学校」，つまり県立運動公園南側丘陵が最適であるとの決定がなされた。

この建設予定地として決定された地点は，周知の遺跡として文化庁文化財保護部発行の『全国遺跡地図－長崎県－』に「平山遺跡Ｂ」として登載されており，そのため県教育委員会にも対処の方法について指導と協力を得ることとした。数回に亘る協議の結果，記録保存のための発掘調査を実施することにした。昭和53年12月から用地の買収にかゝり，地権者27名の協力を得て学校用地取付道路，併せて40,583㎡の買収を翌54年２月に完了した。

第一次調査は，校舎建設予定地10,000㎡について昭和54年４月９日から同月28日まで県教育庁文化課の協力を得て実施された。その結果，約2,000㎡が遺跡の範囲として確認されたのである。

また，第二次調査は，対象地約2,000㎡について市教育委員会において実施した。

なお，詳細については後章において述べる処である。

調査参加者は以下の通りである。

第一次調査

調査総括	前田勇夫	諫早市教育委員会教育長（昭和55年９月退職）	
	徳永直喜	同	教育次長（昭和55年６月移動）
	田渕茂夫	同	社会教育課長（昭和55年６月移動）
	松尾　誠	同	補佐
	大嶽一栄	同	事務職員（昭和54年７月移動）
	川原万平	同	同
調査担当	安楽　勉	長崎県教育庁文化課　文化財保護主事	

調査担当　高野晋司　長崎県教育庁文化課　文化財保護主事
　　福田一志　同　　文化財調査員

第二次調査

調査総括　前田勇夫　諫早市教育委員会教育長
　　徳永直喜　同　　教育次長
　　田渕茂夫　同　　社会教育課長
　　松尾　誠　同　　補佐
　　北村雅史　同　　事務職員（昭和55年６月移動）
調査担当　秀島貞康　同
　　渡邊康行　立正大学学生
調査協力者
　　原口　勲　諫早市土地開発公社
　　土井文昭　同
　　㈱梶原組
　　稲田三千年

なお，炎天下の調査にもかゝわらず，下記の方々に調査外業員としてお世話になった。記して謝意を表したい。

野々村ツル，土井浪江，山本ツジ，田中ソツエ，江島タエ子，西山ヒデ，牧島アヤノ，松尾フミ子，松尾和広，鶴田澄枝，山口キヌエ，鶴田久枝，稲田フサエ，鶴田知恵子，徳永テル，馬場政信，川内泰子，川内時枝，酒井サクエ，川内清美，池田尚俊，山崎剛治，金沢和明，御所清隆，鶴田敦夫，土井貞子，下釜キミエ，土井ヨシエ，田中千鶴枝，山口トシエ，柴田とし子，川内ミヨシ，蒲田ヨシノ，土井タカ，橋元アサエ，松尾キミエ，山口ミチヨ，山本ヒデ，土井タヅエ，毎熊喜代，宮崎タミ子，平古場カズ，濱崎恵子，荒木博美，中川みよ子

遺物整理にあたっては下記の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。

緒方奈智子，松竹文子，福田弥枝子

第II章　遺跡の位置と環境

平山遺跡Ｂ地点は，諫早市栗面町392，393の１，２，394，415番地に所在し，東径130°2′30″，北緯32°49′30″を測る。遺跡は北方に向って高度を逓減する丘陵の東側斜面に位置しており，標高約50ｍ内外である。当丘陵北側は現在島原方面と佐世保・長崎を結ぶ国道57号線によって分断されているが元来はより張り出していたものである。この国道北側に小ケ倉川と合流する埋津川が東流し，流路を北方にとって本明川と合流して青い泥土の有明海へと流入している。また西側には土師野尾に源を発する東大川が狭少な水田を灌漑して大村湾へと注いでいる。

本遺跡を含めた周辺の遺跡群を概観すると，昨今衆目の注視を集めている中核工業団地域内の遺跡群[註1]（西輪久道遺跡，鷹野遺跡，長牟田遺跡，平遺跡など），及び現在は消滅して了った九州横断自動車道域内の遺跡群[註2]（西輪久道，牛込Ｂ，柿崎，岩下遺跡等）がある。これらの遺跡群は，旧石器時代～縄文時代早期末・前期の資料を多く提供しており，西大川を中心とした遺跡立地の在り方，生活・文化圏の復元に多くの示唆を与えるであろう。また東方約２㎞には昭和47年宅地造成により緊急発掘調査が実施された小栗遺跡Ｂ地点[註3]がある。弥生時代中期～後期の埋葬地であり，昭和55年にはＡ地点と対峙する，つまり丘陵東側斜面の土取り及び宅造地において新たに甕棺墓，箱式石棺墓の確認がなされ，Ａ地点の採集資料[註4]などを勘案すると丘陵一帯が，弥生時代前期末～古墳時代にかけての複合した墓地群であろうと推量される。なお，当遺跡と対峙する鷲崎の丘陵地に生活址が存在する可能性も十分あり，早急な確認が必要とされる処である。

また，小栗丘陵北方，国道57号線を挟んで約１㎞に農業高等学校遺跡がある。かつて同所より銅剣が出土したと報じられている[註5]。一帯は西郷（ニシゴウ）町と呼称され，『和名類聚抄』に言う処の「新居(爾比井)」の候補地の一つに挙げられている[註6]。（倭）

このように，本遺跡を取り巻く遺跡群の中には非常に貴重なものが多く，今後の解明の手を必要としている。

註

1　県文化課　副島和明氏のご教示による。

2　県文化課　田川肇氏のご教示による。

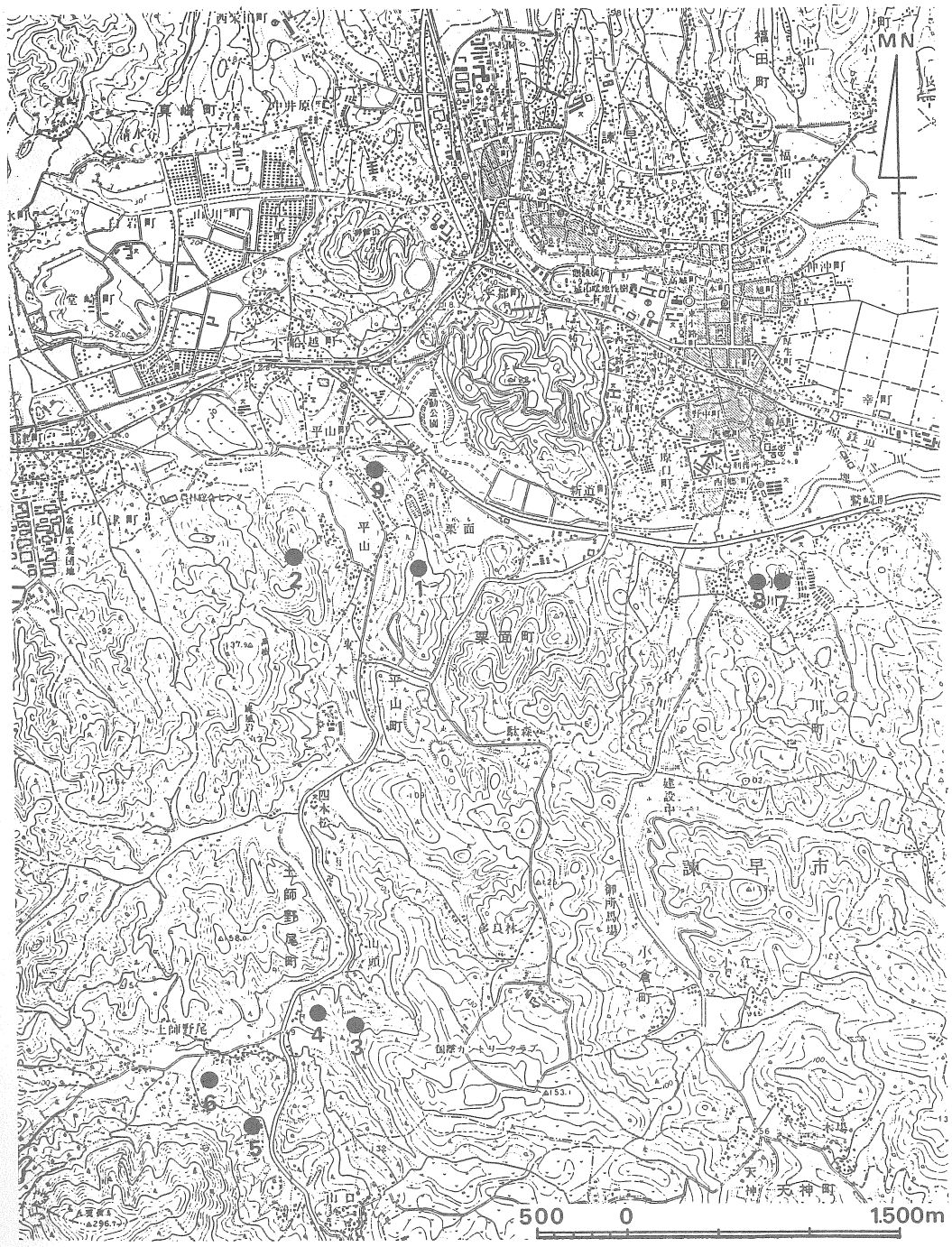
3　県文化課　正林護氏のご教示による。報告書近刊

4　古賀力氏のご教示による

5　正林護「諫早市出土の銅剣」　九州考古学41～44　昭和46年

6　田中松雄「第四篇　古代」　諫早市史　第一巻　昭和30年

　　瀬野精一郎「長崎県の歴史」昭和47年



1	**平山遺跡B**	4	土師野尾遺跡	7	小川林ノ辻遺跡
2	平山丘陵遺跡	5	土師野尾窯跡	8	小栗遺跡A
3	土師野尾遺跡	6	〃	9	平山遺跡A

第1図　平山遺跡B地点の位置及び周辺遺跡分布図

第Ⅲ章　第一次調査

第一節　第一次調査の概要とその結果

当初の分布調査の折には，屋根上の平担部分を中心に約10万m²にわたって遺物の散布が認められ，更に一部露出した土層の堆積状況は遺物包含層及び何らかの遺構の存在を窺いしめるものであった。

そこで，とりあえず包含層の有無，並びにその範囲の拡がり等の内容把握の必要性が生じることとなり，昭和54年４月９日～同月28日までの16日間にわたって第一次調査を実施することとなった。

調査区設定には，諫早市開発公社によって測量されていた，南北に打たれた20ｍ間隔の中心杭を利用することとし，東西120ｍ，南北140ｍの範囲について一辺20ｍの方眼を設定した。（第２・３図）

その呼称は，東西軸は西から東へＡ～Ｇとし，南北軸は南から北へそれぞれ１～６と付した。しかし，この内Ａ列とＧ列についてはそれぞれ地形的に傾斜が急である為にＧ－２Ｇ.においてトレンチを１ヵ所設定した他は，調査対象からはずすこととした。

結果として，校舎建設予定区域約１万m²を対象面積として，その中に17トレンチ，計276m²を試掘したことになる。

上述の試掘の結果，遺物包含層を認めた区域は，Ｃ－２，Ｃ－３，Ｄ－２，Ｄ－３，Ｅ－３Ｇ.の計６グリッドに於いてであり，現地形の状況からその面積は約2,000m²程度に限定されることとなった。

以下それらのグリッドについて概略を記しておく。

Ｃ－２Ｇ.（第４図，図版２－１・２）

Ｃ－２，Ｄ－２Ｇ.にまたがる２×10ｍのトレンチである。表土下約40cmで，Ⅲ層・褐色土の遺物包含層に移る。その厚みは40～60cmあり，石鏃や多くの黒燿石剝片が出土する。なおⅣ層は，拳大から人頭大の安山岩の風化礫を含む黄褐色土層で無遺物層である。

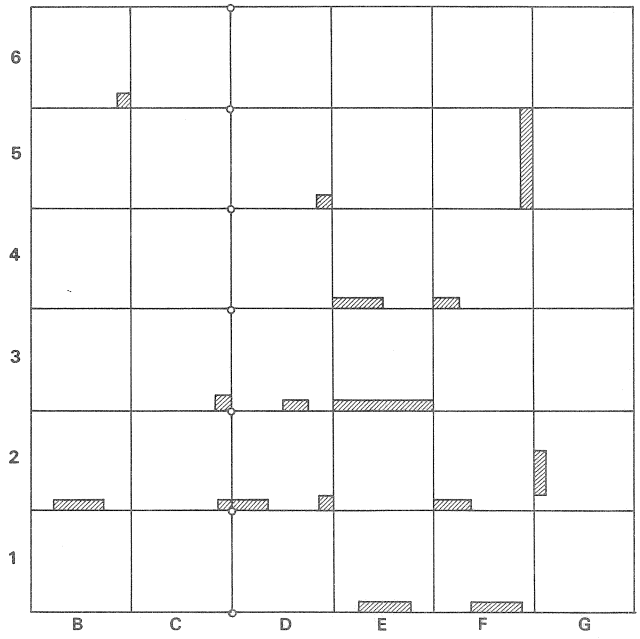
Ｃ－３Ｇ.

全体的に層の堆積浅く，表土下60cmで地山に到る。包含層であるⅢ層の堆積は不明瞭であるが，地山直上から押型文の土器片が１片出土した。層位の堆積状況から遺跡の西限に近いものと思われる。

Ｄ－２Ｇ.（第５図，図版３－１）

図のとおり，厚さ40ｍ程度の包含層が堆積するが，西壁南側には，Ⅲ層が消失する。この部

第２図 遺跡附近地形図・第二次調査グリッド配置図及び発掘区域図（S－1/1,500）



第３図　第一次調査グリッド配置図及び発掘区域図

分が遺跡の南限付近と思われる。なお，Ⅲ層中より弥生式土器片が出土している。

D－3G.

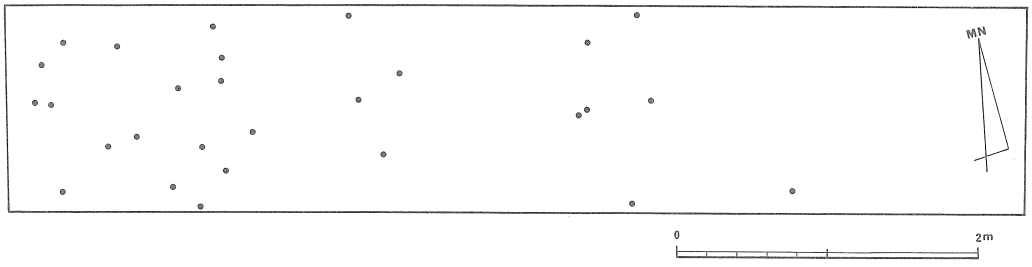
C－3 G.において出土した押型文土器片の関連をみる為に設定したトレンチである。土層の堆積状況は他の遺物包含層のある区と同一であるが，よりⅢ層中に礫が多く含まれる。またトレンチ東南隅に焼土がみられ，中からスクレーパーが1点出土した。しかし土器は出土せず，時期は不明である。

E－3G.

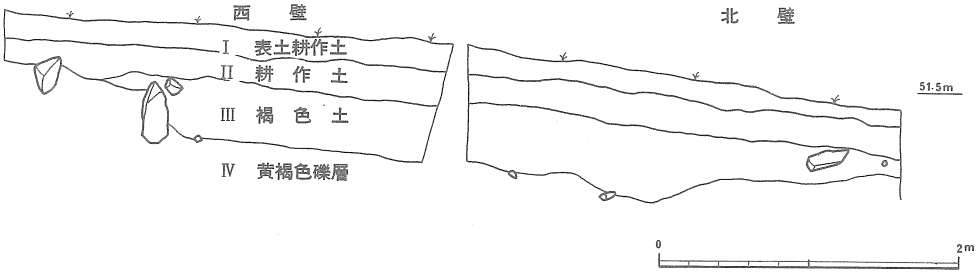
西から東へゆるやかに下る地形に設定した幅2 m，長さ20mのトレンチである。土層の堆積状況は他の区と異なり，表土下に厚さ60m程度の漆黒色土がみられ，遺物包含層である褐色土は，東半の一部のみに認められる程度である。なお遺物は表層に集中し，漆黒色土からは出土しない。

この他，B－2 G.においてマイクロコア1点を表採したが，表土下はすぐ地山であり，包含層は存在しない。

以上，全体的に包含層の堆積は浅く，遺物は出土状況も疎であるが，D－3 G.焼土に見られる如く，生活遺構の可能性もある事から遺跡予想範囲2,000m²については，その区域が校舎建設で消滅する限りにおいては全面調査をする必要が指摘される。（高野）



第4図　C・D－2G.遺物出土ドット・マップ



第5図　D－2G.土層断面図

第二節　第一次調査の出土遺物

17トレンチ，276m²を調査対象として実施し，石器88点，土器59点を調査及び表採によって検出した。出土遺物の多くはⅢ層褐色土層中より検出されたが，土器，石器が混在するという状態であった。前節において既述した如く，遺物包含層は約2,000m²に恒って認められたのであるが，遺物の出土は各ブリッドにおいて粗密が顕著に認められた。

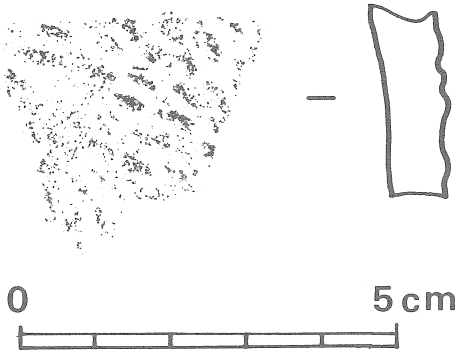
土器（第６図　図版３－２）

図示した土器は，Ｃ－３Ｇ.において表採した押型文土器である。粒の細かい楕円押型文を水平方向と斜方向に施文している。楕円粒は約５㎜ほどを測る。上下は不分明であるため，粘土帯接合面を上位にして示した。色調は内面茶褐色，外面黒褐色を呈し，胎土は微細粒を多含する。焼成は普通で，器壁の厚さは約８㎜ほどを測る。

この他，胎土，焼成より縄文式土器と認められるものが数片あるが，小破片かつ器表がかなり荒れているため図示できない。土師器も多く検出されているが，小破片であるため器形を窺い知ることのできるものはない。

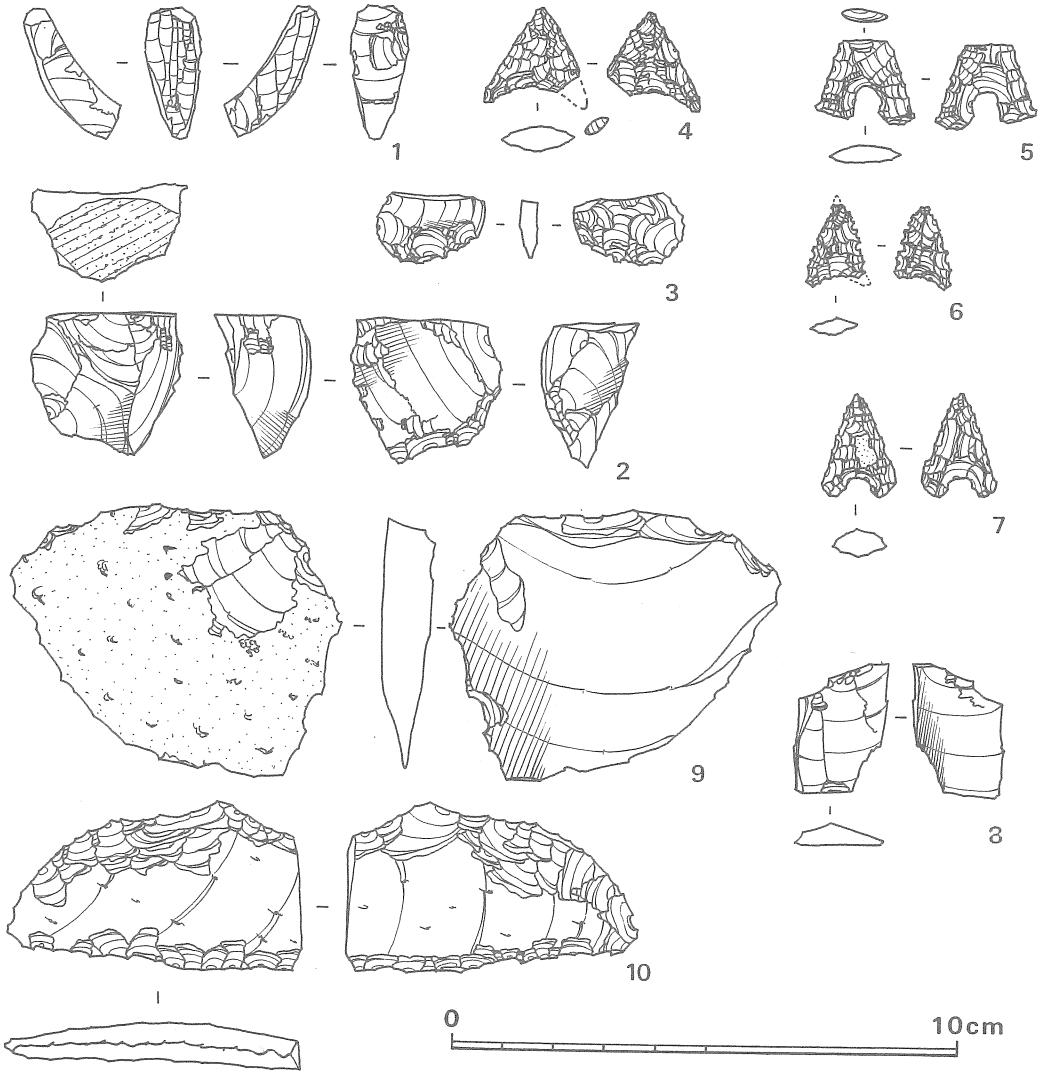
石器（第７図　図版３－２）

１は細石刃核である。プラットフォームよりの加撃で打割されており，全形を知ることはできない。７条の剥離面を残す。上・下端はガジリ。黒燿石を素材とする。Ｂ－２Ｇ.表採。２は石核である。打面は未調整で一部自然面を残している。打面はほぼ90°ずつ転移している。この石核より剥出された剥片は横広のものでさして大形ではない。このように多打面を有する石核は他にも認められる。灰黒色を呈す黒燿石を素材としている。Ｄ－２Ｇ．出土。３は，サイドブレイドあるいは石鏃である。調査時に上位を欠損。周縁より調整を加えるが一部剥出面を残す。良質の黒燿石を使用。Ｃ－４Ｇ.出土。４～７は石鏃で，浅深の差はあるが各々抉り部を有する。４は黒燿石を使用しており，三角形状を呈す。片脚は外方からの加撃で折損。Ｃ－２Ｇ出土。５，７は所謂鍬形鏃と呼ばれるもので，５は黒燿石を使用。Ｂ面からの加撃により折損。Ｃ－２Ｇ.出土。７は安山岩を使用し，一部自然面を残す。Ｅ－３



第６図 土器拓影及び実測図(Ｓ－1/1)

G.出土。４・７共に脚端部がはねるクセを持つ。６は黒燿石を使用し，鋸歯状を呈す。先端・片脚を欠損。Ｅ－３ G.出土。８は黒燿石を素材とした縦長剥片で，打面は未調整。パティナは古い。Ｄ－２ G.出土。９は安山岩を素材とした大形剥片である。打面は調整されており，最初に剥出されたものである。表皮自然面を多く残す。使用痕は顕著でない。Ｄ－２ G.出土。10は安山岩製の縦長剥片を素材としたスクレーパーである。周縁より調整を施すが，中央部に多くの素材剥出面を残す。上部彎曲部の調整はラフであり，石匙のツマミ部を折損後，再調整したものかとも思われる。一部を折損。Ｄ－３ G.出土。



第７図　石器実測図（Ｓ－2/3）

第Ⅳ章　第二次調査

第一節　調査の方法と経過

１．調査の方法

第一次調査によって明確にされた遺物分布範囲約2,000m²を対象として調査した。調査法はグリッド方式を採用した。グリッドの設定は，第一次調査の基準杭，つまりＮ－１°－Ｗで予め打たれていた20ｍ間隔の基準杭を利用し，東一西，南一北に各々５ｍ毎に杭打ちを行った。したがって第一次調査時に設定されたグリッドＣ－１Ｇ.は，第二次調査においてはＡ～Ｄ－１～４Ｇ.と16分割されたのである。（第３図）

グリッドの名称は，Ｘ軸のアルファベットを先に標示し，Ｙ軸の数字を付して表わした。

調査は，各層位ごとに掘り下げ，遺構が検出された時は拡張し面的調査を行うことを原則とした。

また，出土遺物はその出土位置を平板により1/20でドット化し，同時にレベル取りを行った。

土層断面は，土層の堆積状況，地形の傾斜，日照の問題を勘案してグリッド南西壁を各々50cm残して，土層観察用の畦とし，1/10で図化を行った。

しかし，次節において述べるが，土層の堆積が極めて単純であり，かつ調査期間が短かいこと，混在の様相が認められたため，同年８月７日以後は，全面的な調査に取りかかることとした。よって，土層観察用の畦は，当丘陵東側斜面を東一西，南一北に縦横断するように設定した。すなわち，東－西ラインは５－６列の北壁を，また南－北ラインはＥ－Ｆ列の東壁を1/10で図化することとした。

２．調査の経過

前項において記述したように，調査は周辺部より実施し，順次遺跡の本体と思われる地区へと進めた。このようにして，先ずＪ－11Ｇ.，Ｌ－10Ｇ.の調査に取り掛った。

日誌抄

7/13～16　発掘調査予定地2,000m²の草刈り及び発掘器材の搬入。グリッド設定のための杭打ち。

7/18～30　本日より発掘調査に取り掛かる。

周辺部のＪ－11Ｇ.，Ｌ－10Ｇ.，Ｉ－10Ｇ.，Ｊ－７Ｇ.，Ｇ－10Ｇ.，Ｅ－10Ｇ.，Ｆ－12Ｇ.発掘を行うが遺物の出土は認められない。各グリッド南，西位に幅１ｍのサブ・トレ

ンチを入れて包含層の有無を調査。遺物の包含層が確認されないまま基盤層と思われる安山岩の風化クサリ礫を含む黄褐色土になる。表土から約１～1.5mほどである。19日に器材小屋を建てる。表土層から土器，石器の出土あり。Ｌ－10Ｇにおいて認められた締りの無い黒色土斑褐色土のベースである火山灰様の黒色土はＩ－Ｊライン以西では認められない。よって，この層は浅い谷地形に流れ込んだものと判明。24日休憩用テント設営。

7/31～8/6　Ｄ－10Ｇ.，Ｅ－９・10Ｇ.，Ｆ－２・３・12Ｇ.，Ｇ－６Ｇ.，Ｈ－６Ｇ.，Ｊ－７Ｇ.の調査を行う。Ｅ－10Ｇ.に於てグリッドほぼ中央に集石を認める。石材は被熱の痕跡を認めず，また炭化物の検出等も無く，性格不明である。よって写真撮影，実測を行うことにする。Ｈ－６Ｇ.において土師器が集中して出土し始める。また東北隅において軟玉(？)製小玉が１個検出される。６日より調査と併行して教育委員会内において遺物の整理を開始する。

8/7～13　全面調査を実施するための表土排除作業を行う。また土層観察用の畦及び土層断面図作成の為の畦を設定する。周辺部グリッドの土層断面は南及び西壁とすることに決定。縮尺は1/10で行うこととする。Ｈ－８Ｇ.より土師器が潰れた状態で一括出土。清掃後写真撮影を行い，縮尺1/2で図化することとする。Ｈ－８Ｇ.，Ｇ－７Ｇ.の実測ポイントを平板に落とす。

8/14～16　盆休み

8/18～31　Ｆ－６・７・８Ｇ.，Ｇ－６・７・８Ｇ.，Ｈ－６・７・８Ｇ等の褐色土層の調査。Ｈ－８Ｇ.土器集中部のグリッド拡張及び精査を実施する。Ｄ－６・７Ｇ.，Ｅ－６・７Ｇの表土排除を行うが，安山岩クサリ礫混りの土層が現われ，遺物包倉層の南限を確認。Ｅ－４Ｇ.において鍬形鏃をはじめフレーク，チップ類の出土が目立つ。Ｅ－４Ｇ.からナイフ形石器出土。Ｄ－４・５Ｇ.においてナイフ形石器，台形様石器をはじめ剝片，砕(屑)片の出土目立つ。Ｈ－８Ｇ.一括土器実測完了。

9/1　Ｄ－４・５・６Ｇ.，Ｅ－３・４・５・６Ｇ.等の調査。Ｅ－４Ｇ.の褐色土層の堆積がかなり厚く認められていたが，徐々に次層に近づいており，漸次ベースになるもよう。安山岩質円礫～亜角礫が多く現われており，基層はかなりの凹凸が認められる。Ｄ－５Ｇ.，Ｅ－５Ｇ.において不明土壙各一基検出。

9/2　調査期日と調査範囲を勘案し，本日より表土排除をユンボを使って行うことにする。

9/5～20　表土排除に伴い，褐色土の精査。Ｈ－５Ｇ.に於て潰れた状況の高杯を検出，写真撮影・実測を行う。土層断面図の作成。各グリッドの遺物取り上げ，不明土壙の精査，写真撮影，実測を行う。

9/21　本日を以って調査をすべて完了する。

実働52日，作業外業員延べ人数1,198人，調査面積1,500㎡であった。

第二節　層　　位

当遺跡を縦横断するように設定した土層観察用畦の中，東西ラインつまり５－６列の土層断面図及び土層堆積状況の対比のためＬ－10Ｇ.の南壁断面図を図示した。

まず，５－６列の土層図より簡単に説明を加える。(第９図)

Ⅰ層　　表土

Ⅱ層　　褐色粘質土層，粒度は細かく均一。しまり，粘性に富む。若干のカーボンと風化安山岩粒を含む。乾燥すると縦にクラックが走る。遺物包含層。

Ⅱａ層　黄褐色粘質土層。Ⅱ層上部にのるレンズ状堆積物。粘性があり，細粒で均一。極めて固い。

Ⅲ層　　黒褐色土層，粘性弱くやや砂質っぽい。細粒でサラサラした感じ。

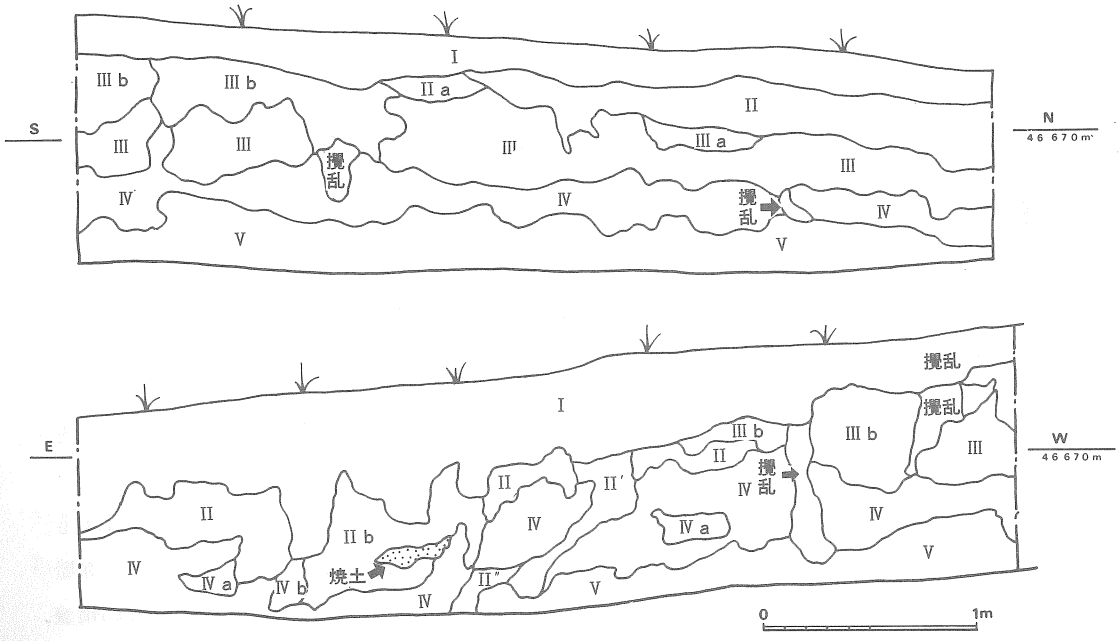
Ⅳ層　　暗黄褐色粘質土層。Ⅲ層と似近るが，粘性が強い。砂粒を多含する。

Ⅴ層　　暗褐色粘質土層。風化安山岩礫を若干含み，しまり，粘性ともに強い。地山との漸移層か。

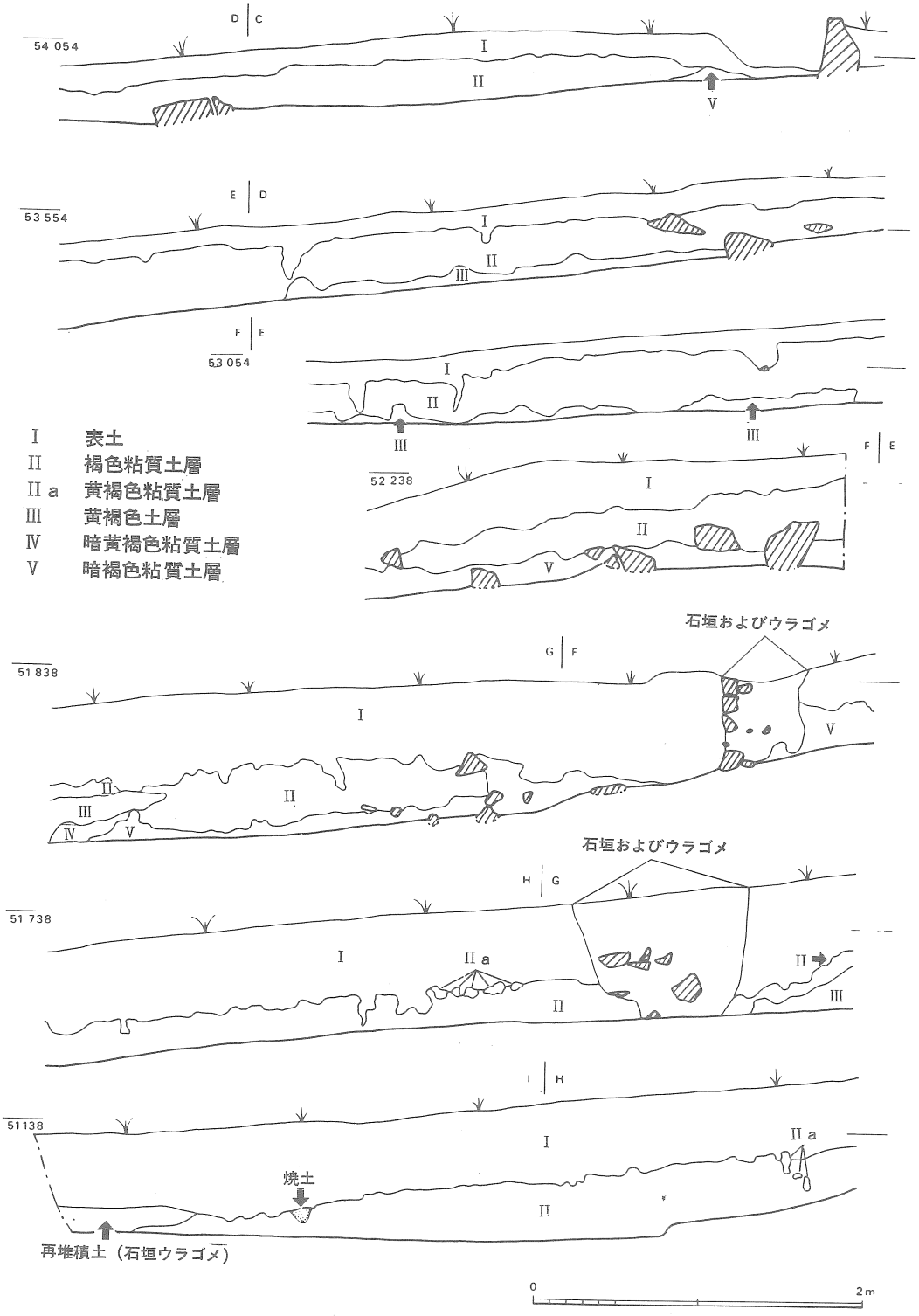
基盤　　風化安山岩礫層でクサリ礫化しているのが窺える。拳大～人頭大の風化安山岩を多含する。中には一抱え～二抱え大の安山岩円礫も含む。

次に，東位下方に設定したＬ－10Ｇ.の土層堆積状態を見てみよう。(第８図)

Ⅰ層　　表土



第８図　Ｌ－10Ｇ.土層断面図



第９図　５－６列土層断面図（Ｓ－1/40）

II層　　褐色粘質土層　粒子は細かく，粘性も弱い。カーボンを少量含有する。

II′層　II層と大差ないが，しまりが強い。

II″層　II′層より色調でやや暗い。カーボンは含まない。

II a 層　暗褐色粘質土層　しまりが強く粘性に富む。

III層　　黒色粘質土層　所謂クロボクといわれる土に似ており，粒子が細かく均一である。乾燥すると縦にクラックが走る。

III a 層　暗黒褐色土層　部分的に褐色土が混入。粘性は弱くサラサラしている。

III b 層　明褐色粘質土層　粒子細かく，しかもしまりは弱い。粘性に富む。全体的に少量のカーボン，焼土塊を含む。

III b′層　茶褐色粘土質　しまりは強く堅いが，弱粘性を示す。

IV層　　暗黒褐色粘質土層　しまり，粘性共に強く，粒子は極めて細かく均一である。

IV a 層　暗褐色粘質土層　しまりはやや弱く粘性に富む。焼土塊を若干含む。

IV b 層　黒色粘質土層　極めて固く，土塊状を呈す。

V層　　暗褐色粘質土層　粒子細かく，しまり，粘性共に強い。

このように，土層の堆積がかなり厚く認められ，L－10G.，つまりレベルが下がるに従い土層の堆積が厚くなる傾向を認めることができる。

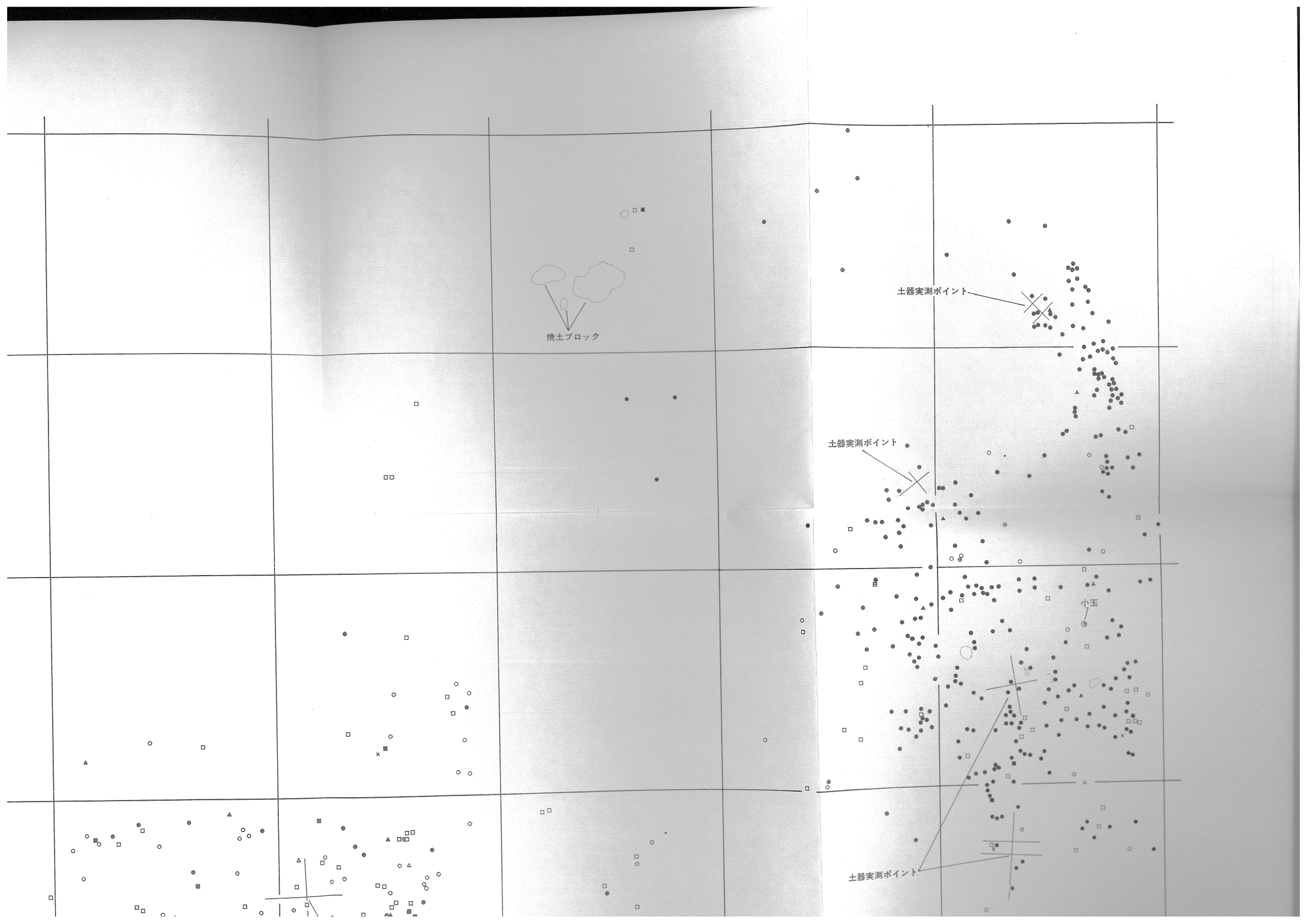
第三節　遺構および遺物

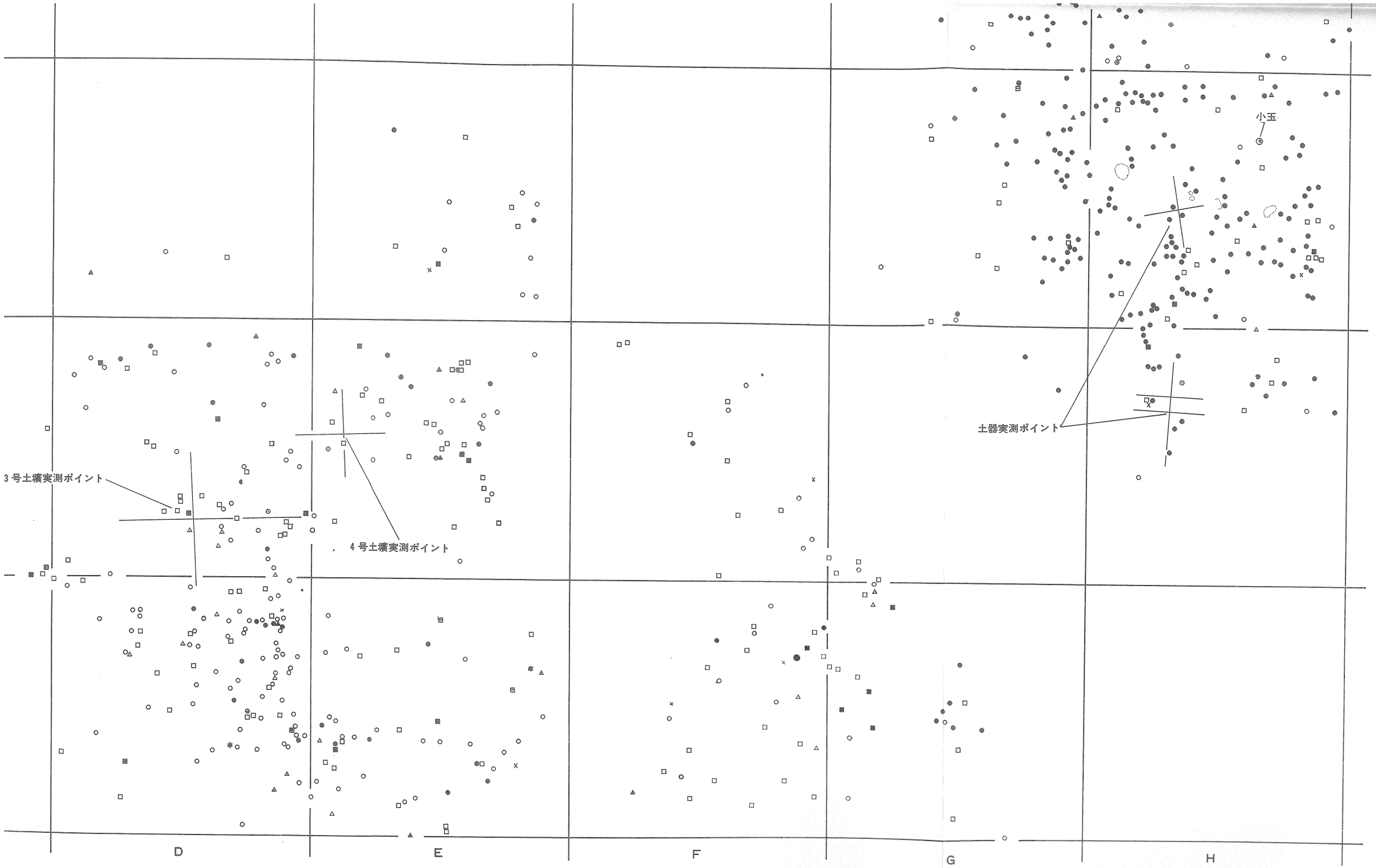
1．遺物の分布状況（第10図）

遺物は層位的に検出された訳ではなく，所謂包含層と言われる土層中より全て検出されており，遺物個々を層位的に分離することは不可能であった。しかし，石器の分布範囲と土器の分布範囲は一部混淆しているが区分・峻別できる状況であった。したがって石器・土器の遺物個個が或る時期の攪乱等外的要因により原位置を離れてしまったとする解釈も可能であるが，同一平面（生活面）上における各時期の複合を反映しているようだ。

石器はD～G－4～6Gにおいて多く認められた。器種別では剥片がD～F－4・5G.，H－6G.，削器がD・E－4・5G.，G－4G.，石鏃がD・E－4・5G.，G－4G.において顕著に認められた。石器の接合関係までの整理が実施できなかったため，詳細は後日に期することとするが，D・E－4・5G.，及びG－4G.に分布の中心があるようだ。またナイフ形石器，台形様石器等はより広範囲に分布する傾向が窺える。

土器は殆んどが土師器でありG・H－5～8G.に分布が認められ，その中でも数ヵ所の集中地点が見られた。


焼土ブロック
土器実測ポイント
土器実測ポイント
小玉
土器実測ポイント

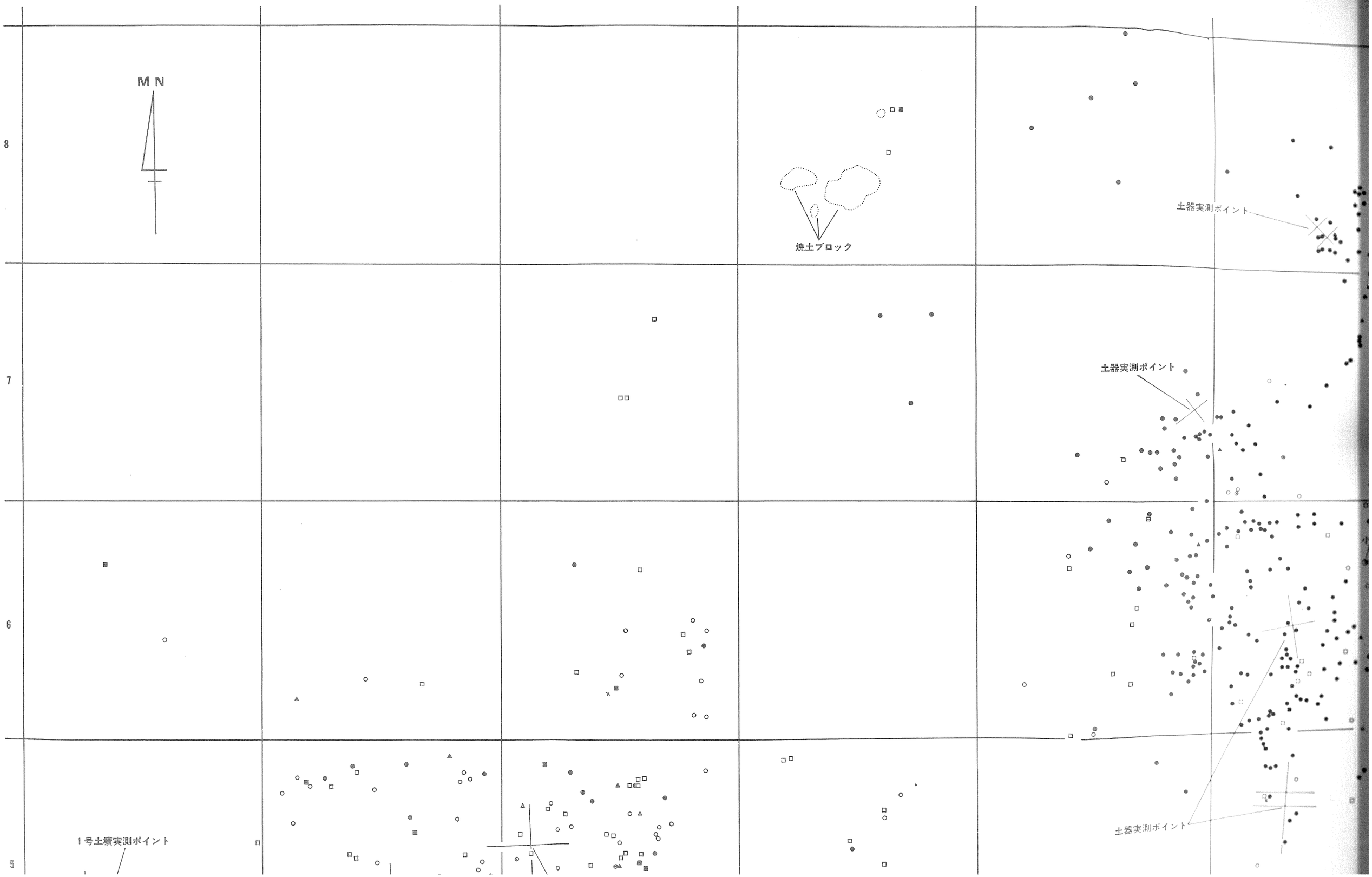


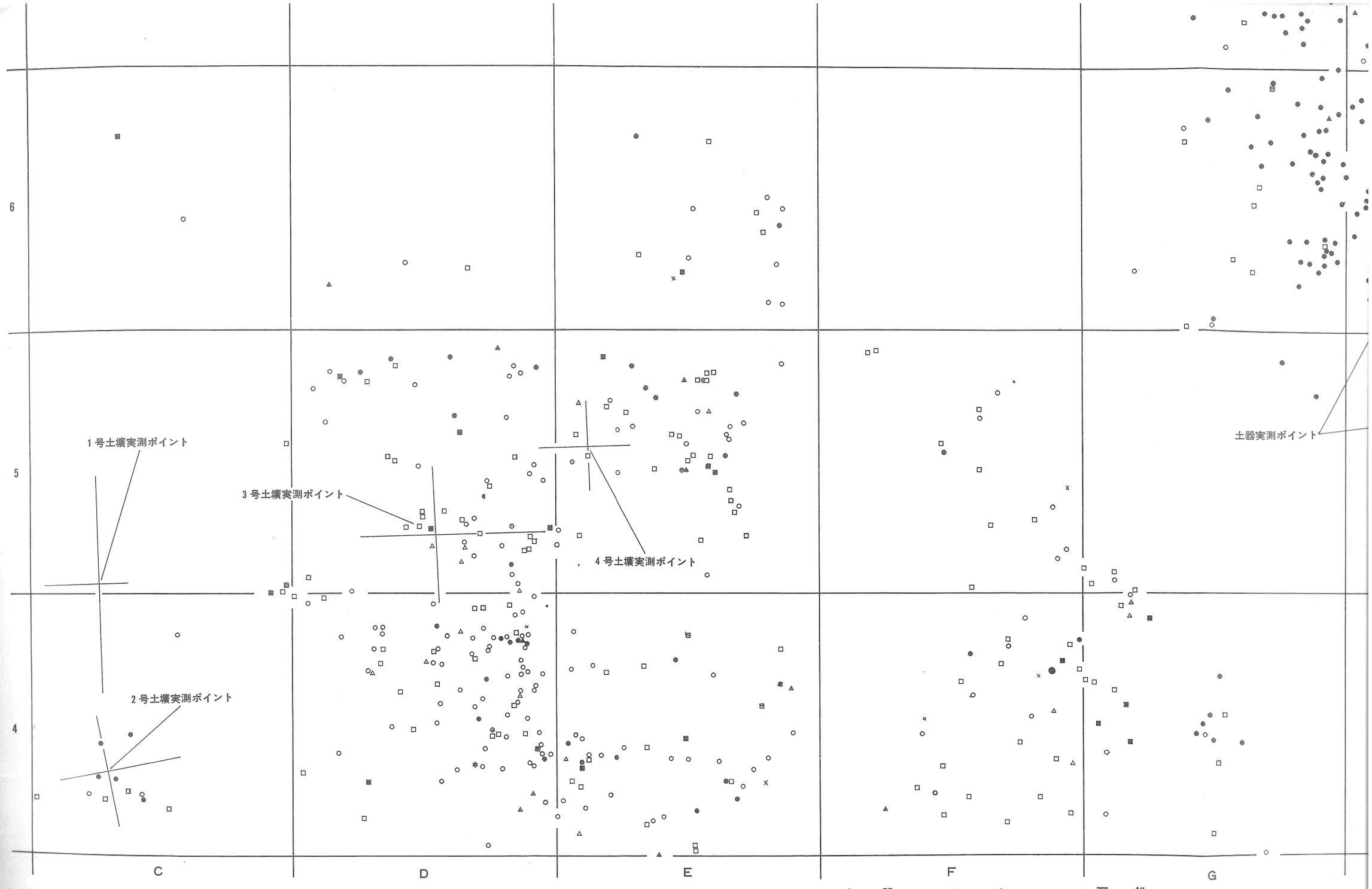
第10図　遺物分布状況図（S－1/80）

凡例

- ● 土　器
- ○ チップ
- □ フレーク
- ■ スクレイパー
- △ 石　鏃
- ▲ u－f
- × 石　核
- ⊙ ナイフ形石器
- ⊡ 台形様石器
- ✱ 細石刃
- ◐ 石　錐
- ◖ 彫　器
- ▲ 自然礫
- ⊖ 石核調整剝片
- ⊟ 二次加工のある石器

0　5m


M N
8
7
6
5
焼土ブロック
土器実測ポイント
土器実測ポイント
土器実測ポイント
1号土壙実測ポイント



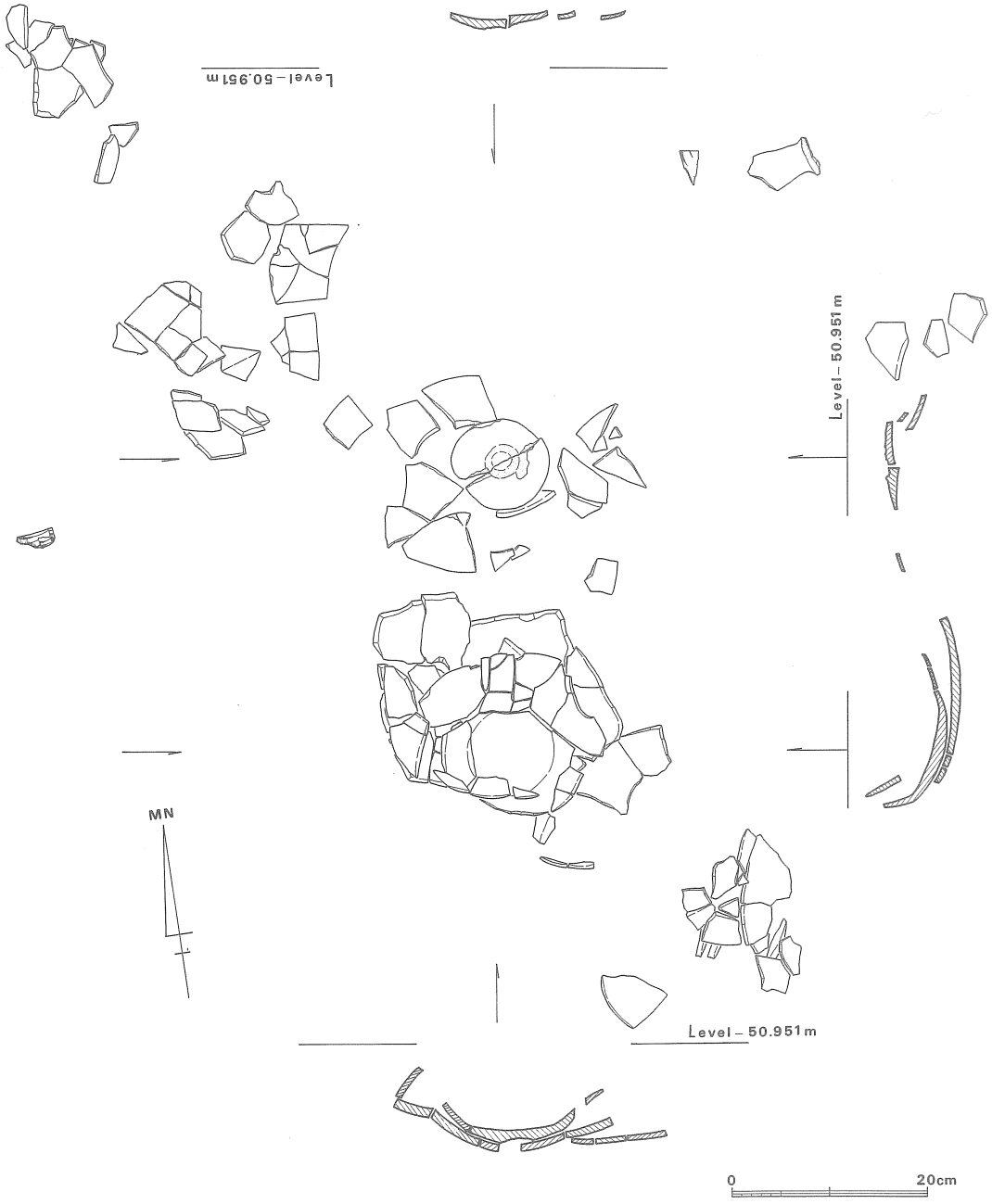
第10図　遺物分布状況図（S－1/80）

凡例

- ● 土　器
- ○ チップ
- □ フレーク
- ■ スクレイパー
- △ 石　鏃
- ▲ u－f
- × 石　核
- ⊙ ナイフ形石器
- ⊡ 台形様石器
- ✱ 細石刃
- ◐ 石　錐
- ◖ 彫　器
- ▲ 自然礫
- ⊖ 石核調整剥片
- ⊟ 二次加工のある石器

0

Ｈ－５Ｇ.（第11図　図版７・８）　ユンボによる表土排除後の精査によって褐色土層中より検出した。高杯口縁部を上及び下に向けて潰れた状態で存在し，南側高杯はその下部に大形の甕形土器底部の一部を内面上位にして検出した。共に脚部を欠損している。

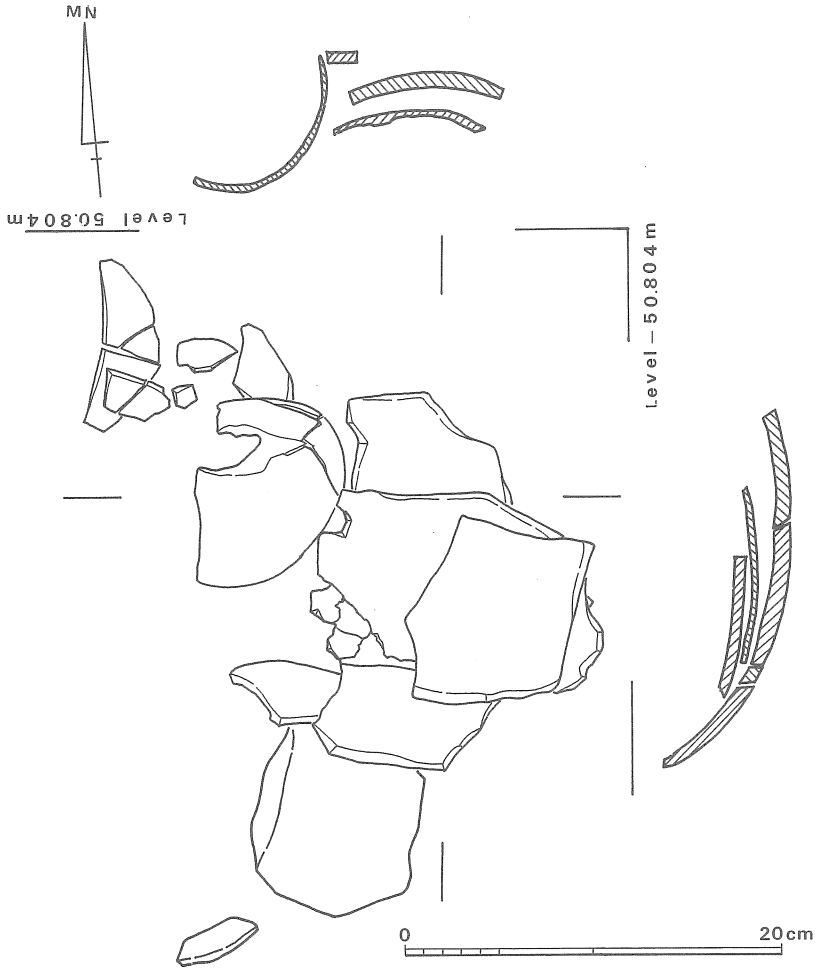


第11図　Ｈ－５Ｇ.土器出土状態実測図

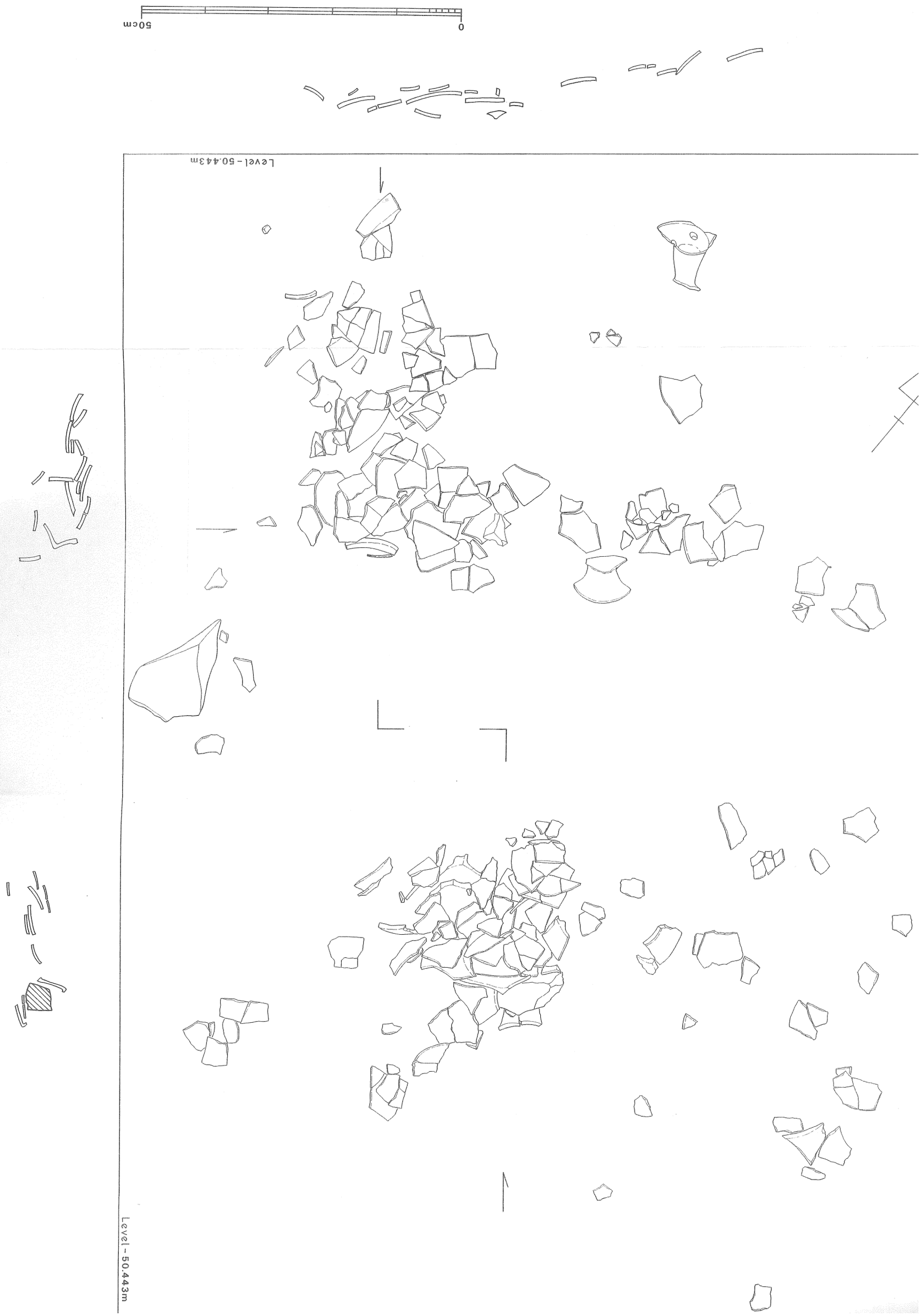
H－6 G.（第12図　図版９－１）　褐色土層中よりの出土で盌，甕を検出した。盌は半欠状態であり口縁部を下に，また甕は胴部破片で内面を上にしている。

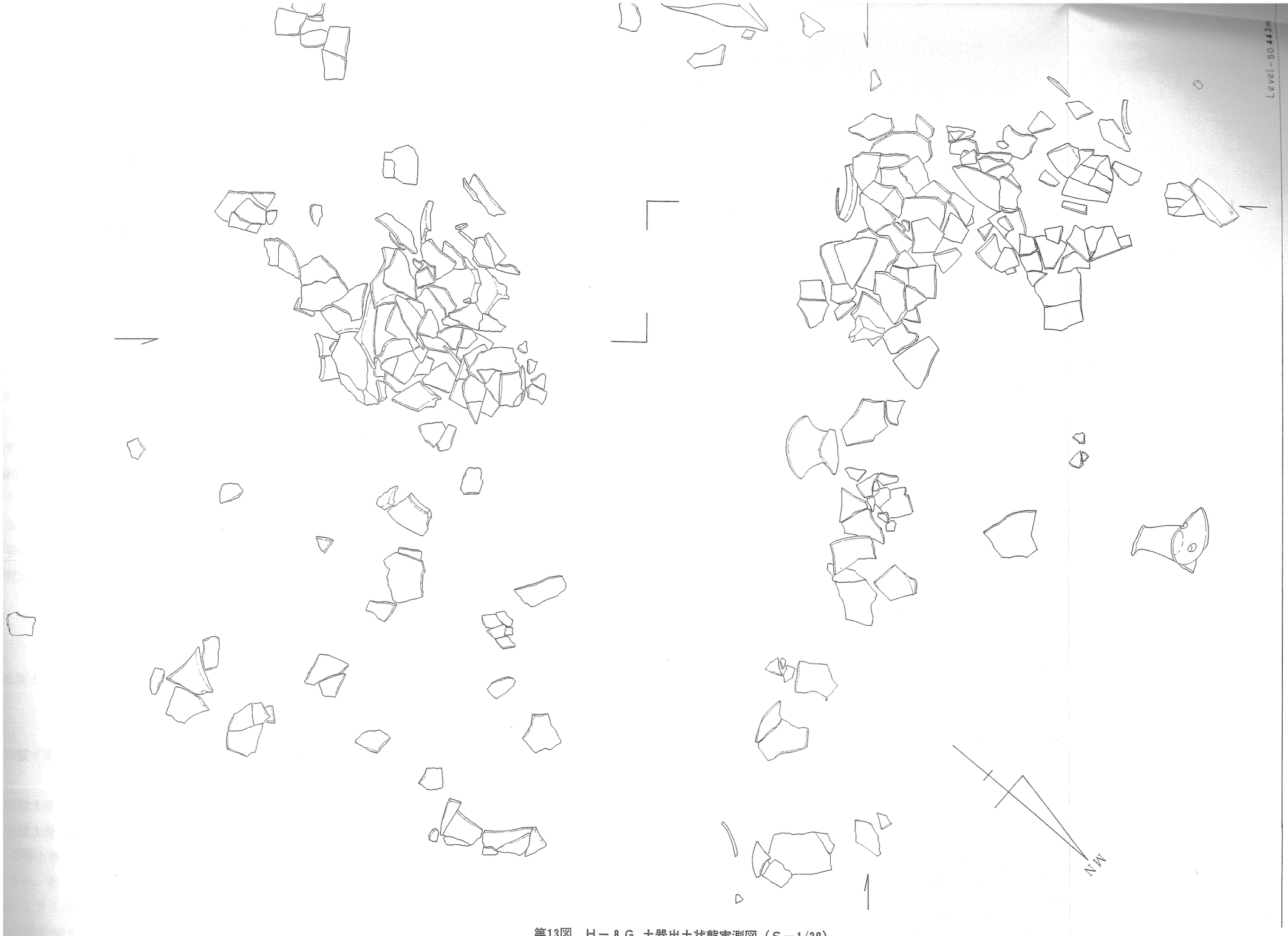
H－8 G.（第13図　図版９－２，10）　褐色土層よりの出土で２ヵ所集中地点が認められる。南側集中地点は甕が主体で外面を上にするもの多く，立ちの状態も認められる。北側集中地点も甕が主体で内面を上に或いは下にするもの相半ばし，立ち状態の破片も存在する。

以上，４ヵ所程度の出土集中地点が確認されたが，完形に復する資料は一例も存在しない。攪乱による散逸が考えられるが，土器が本来の機能を喪失し，廃棄の状態を示しているのであろうか。またH－５G.における高杯の出土状態は意識的に据置されたものと考えられる。性格機能に関しては墓址あるいは祭祀的なものかと推されるが憶測の域を出ない。軟玉製小玉と関連を持つか不明であるが興味深い現象である。当該資料の今後の類例増加を俟つところ大である。



第12図　H－6 G. 土器出土状態実測図（S－1/4）


Level-50.443m
Level-50.443m
0
50cm



第13図　Ｈ－８Ｇ 土器出土状態実測図（Ｓ－1/30）

犬

る。

点

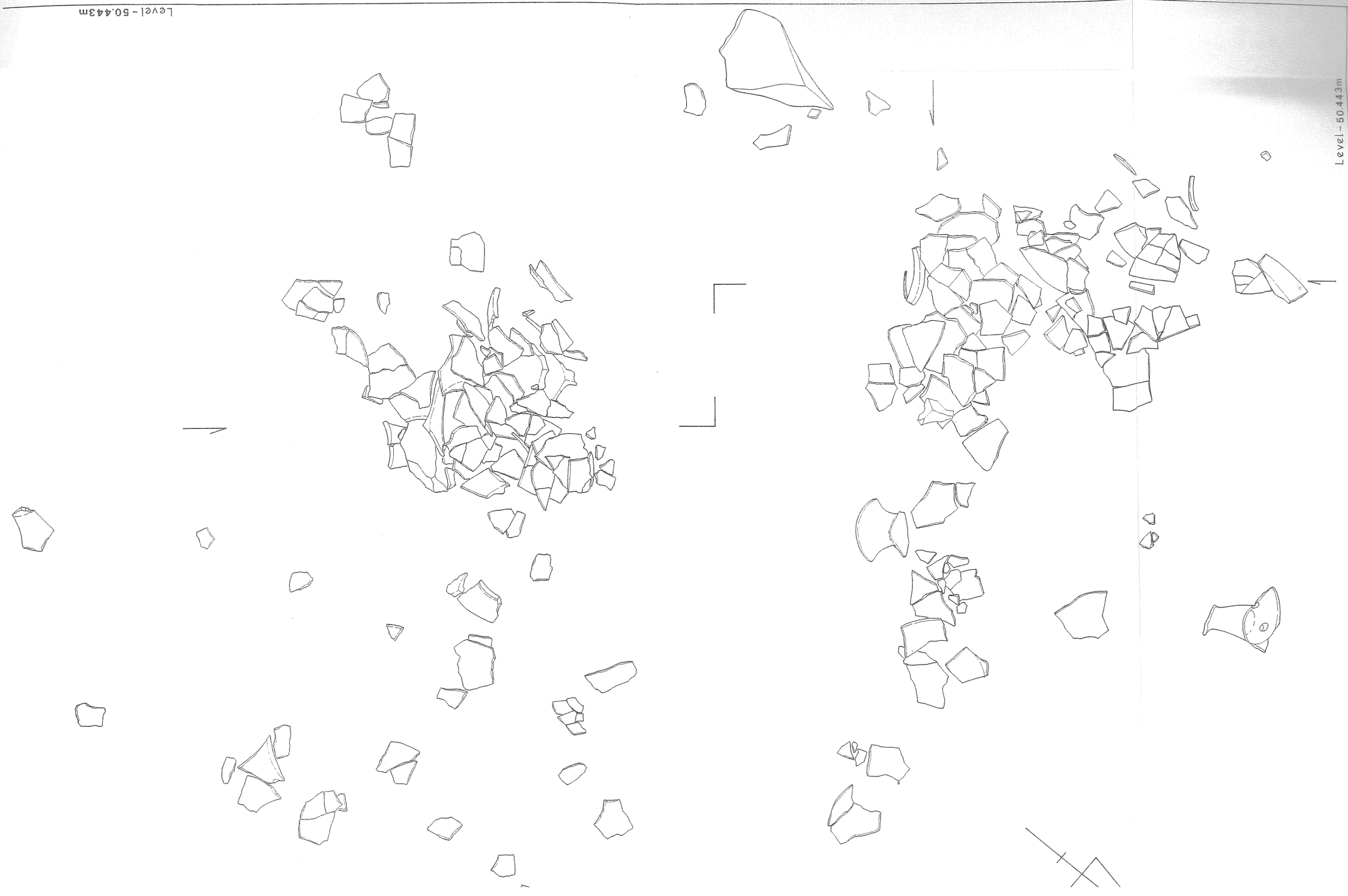
。

あ

格

関

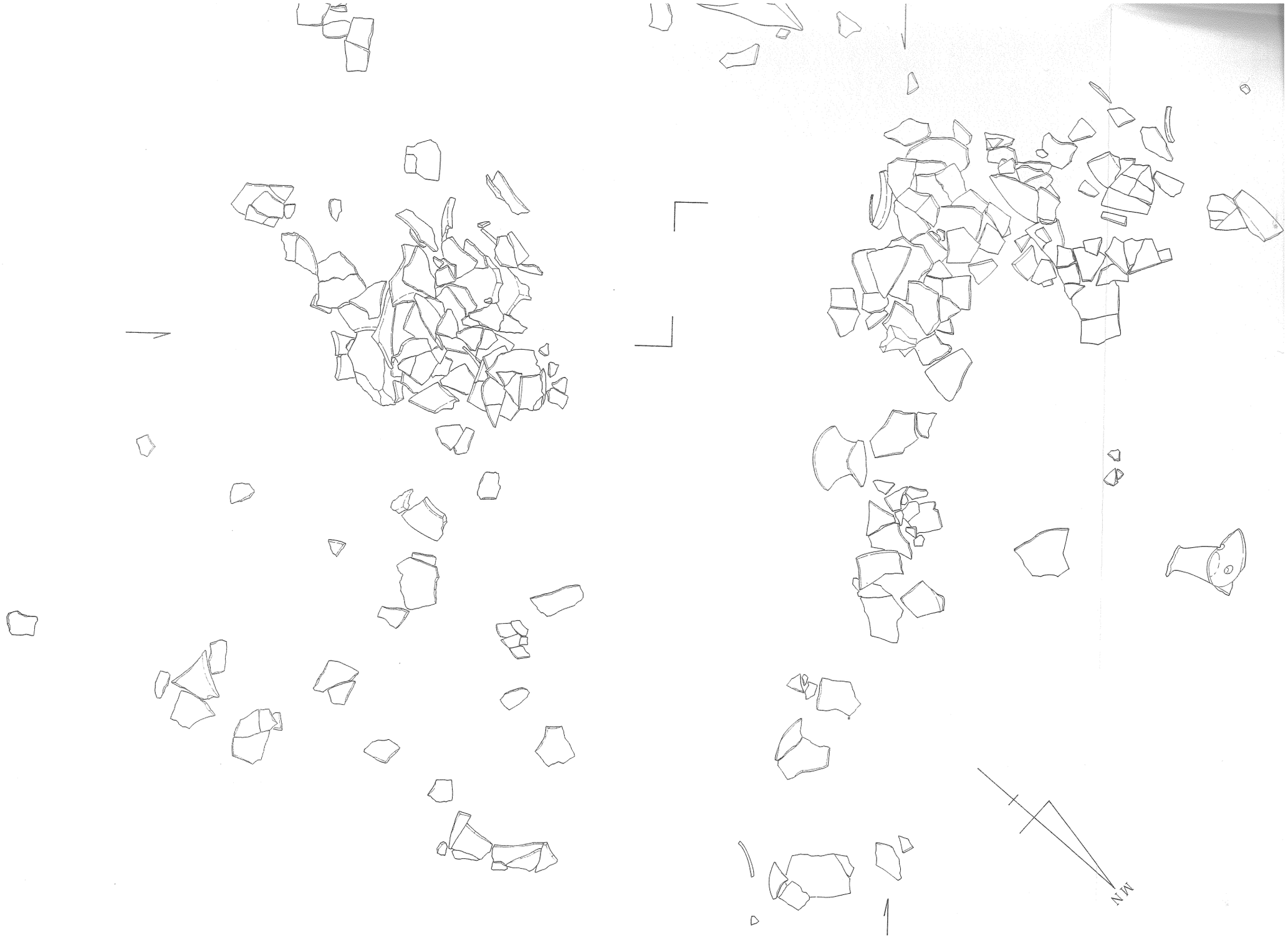
る。



盈は半欠状

が認められる。
北側集中地点
る。
存在しない。
ているのであ
われる。性格
圧製小玉と関
ころ大である。

20cm



第13図　H－8G 土器出土状態実測図（S－1/30）

2．土　　壙

褐色土層下部からクサリ礫化した安山岩風化礫層上部において検出された。4基確認されており，1号土壙はC－4・5G.，2号土壙はC－4G.，3号土壙はD－5G，4号土壙はE－5Gにおいて各々検出した。この中，1・2号土壙を図示・説明する。

1号土壙（第14図　図版11）

不整楕円形のプランを呈し，長径250cm，短径160cm，深さ50cmを測る。壁面から不明瞭な底面にかけて20余ヵ所の窪みが存在し，砂質土の充塡が認められた。この窪みは方向に規則性が認められず，また先細りになって終ることなど共通した特徴をもつ。出土遺物は僅少で土師器甕形土器片，黒燿石剝片が検出され土壙の埋没期を示している。覆土は

Ⅰ層褐色粘質土層　　粒度は極めて細かく粘性に富む。乾燥すると縦にクラックが走る。

Ⅱ〃暗褐色粘質土層　色調においてⅠ層と異なる。

Ⅲ〃明褐色粘土層　　しまり，粘性ともに弱い。若干の砂粒を含む。

Ⅳ〃青灰色粘質土層　地山風化土と思われる。粘性はやや強い。

2号土壙（第14図　図版12）

不整円形のプランを呈し，径200×225cm，深さ60cmを測る。断面舟底状で1号土壙同様明確な床面は存在しない。1号土壙同様方向に規則性のない窪みが認められる。また覆土中及び壁面から突出する安山岩自然礫も存在する。遺物は土師器一片と少ない。覆土は

Ⅰ層　褐色粘質土層　　粒度は細かく粘性に富む。乾燥すると縦にクラックが走る。

Ⅰa層　　Ⅰ層を基調とするが色調は暗褐色を呈す。

Ⅰb〃　　Ⅰ層を基調とするが色調は黄褐色を呈す。

Ⅰc〃　　Ⅰ層とⅤ層の漸移層。色調はⅠ層に似るが安山岩風化礫を含む。

Ⅱ層　黒褐色粘質土層　粘性に富み若干の砂粒を含む。

Ⅱa層　　Ⅱ層を基調とし，しまり・粘性ともに強い。

Ⅱb層　　Ⅱ層とⅤ層の漸移層。全体にボソボソした感がある。

Ⅲ層　暗褐色粘質土層　砂粒を含むが粘性に富んでいる。

Ⅲa層　　Ⅲ層中の独自の堆積物。黄褐色を呈する粘質土でしまりが強い。

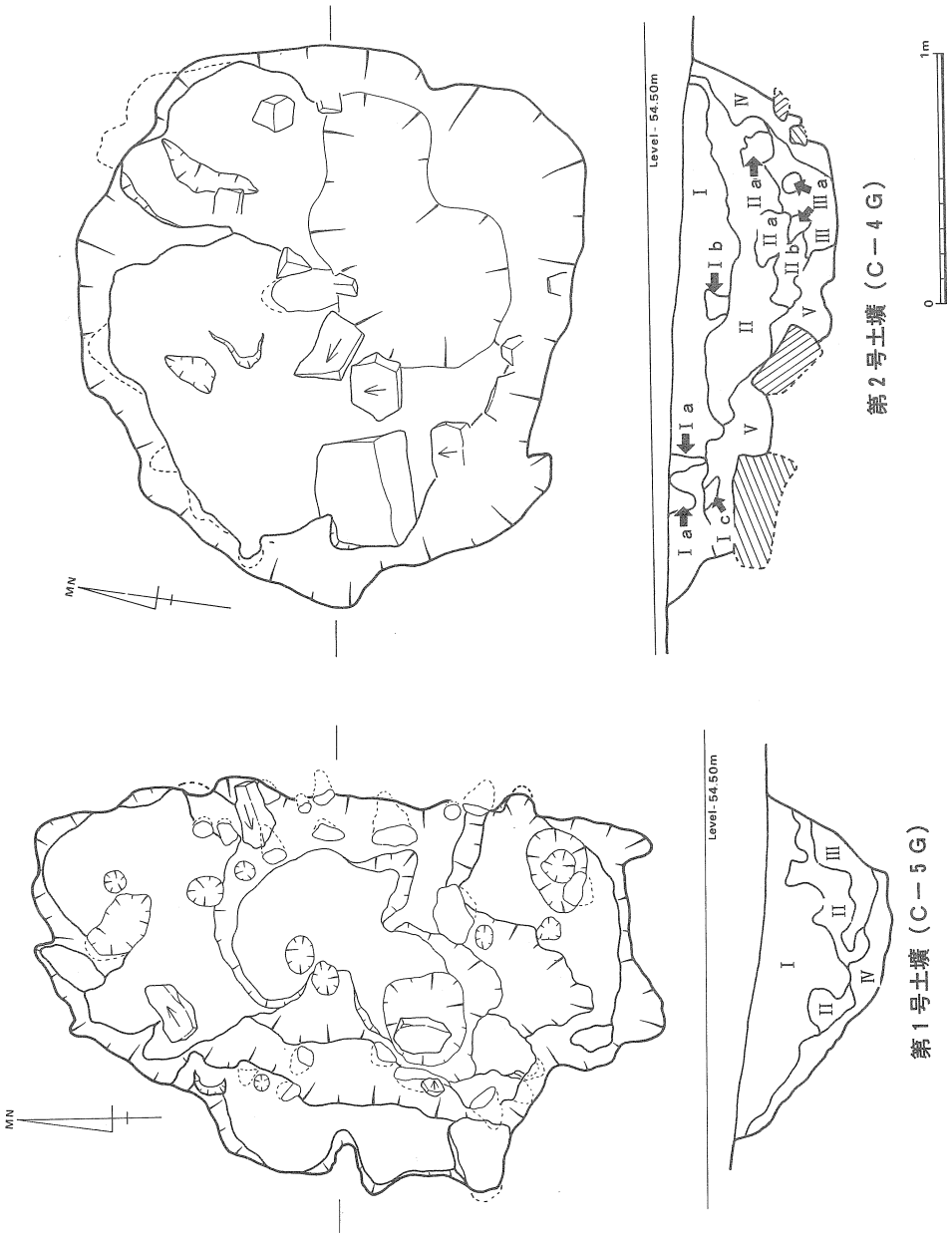
Ⅳ層　暗褐色粘質土層　Ⅲ層よりも色調が若干明るく，また砂粒を含む。

Ⅴ層　青灰色粘質土層　地山風化土と思われる。粘性はやや強い。

当該土壙は「不明土壙」「性格不明の落ち込み」「ローム盛土土壙」などの呼称のもとに，人為的な遺構であるか，若しくは自然的営力により遺された落ち込みであるか，種々論議がされてきた。調査者により人為的な遺構と認めるもの，遺構とは認めないものの両者があるが，これについては能登健氏論文[註1]に詳説してあり本項では割愛する。

本遺跡では前記のように4基確認されているが，形態は1号が不整楕円形，2号が不整円形3・4号が不整長方形と様々なプランを呈している。しかし，断面は共に舟底状若しくはスリバチ状を呈し，明確な底部・床面は有していない。また不明確な床面も堅く締っている状態も認めることはできなかった。

壁面及び床面には更に幾つかの窪み・ピットを有し，その方向に一定の規則性が認められな



第14図　土壙実測図（S－1/30）

いこと，また先細りになって終ること，充塡土は砂質土であることなど共通した特徴をもつ。

また，覆土からの遺物も極めて少なく，当土壙の特徴を良く示している。

以上の理由により人為的な遺構と解するより，自然的営力により遺された落ち込み「風倒木痕」として理解しておきたい。また所属時期は１号・２号土壙の出土遺物により古墳時代以降の所産である。

註１　能登　健　「発掘調査と遺跡の考察」　信濃　第26巻３号　昭和49年

３　集石遺構（第15図　図版13）

発掘域西端高所Ｅ－10Ｇにおいて表土直下，安山岩風化礫混り土層上位で検出した。

石材は安山岩系の自然礫を使用しており小児人頭大～人頭大礫を90×60cmの範囲に上面を揃えるようにして据置していた。また西側直近には集石を半円形に取り囲むように配石した状態が認められた。

この集石下部には径65～55cm，深さ５cmほどの浅い土壙が認められ，同床面東南寄りには径10cm，深さ５cmほどの断面Ｕ字状を呈するピットが更に穿たれていた。土壙は極浅であるが安山岩風化礫を含む褐色土から掘り込まれ，床面は基盤である安山岩風化礫混りの黄褐色土層に到達している。

石材は被熱の痕跡は認められない。また周辺よりの遺物の出土，炭化物・焼土面ともに認められなかったために遺構としての集石として取り扱うべきか若干疑問視されるところであるが，石材裾置の方法，下部土壙の存在より遺構として取り扱うこととした。また当集石東側グリッドにおいて原位置を遊離した状態の焼土塊が遺物包含層中より検出されたが集石との関連は不明である。

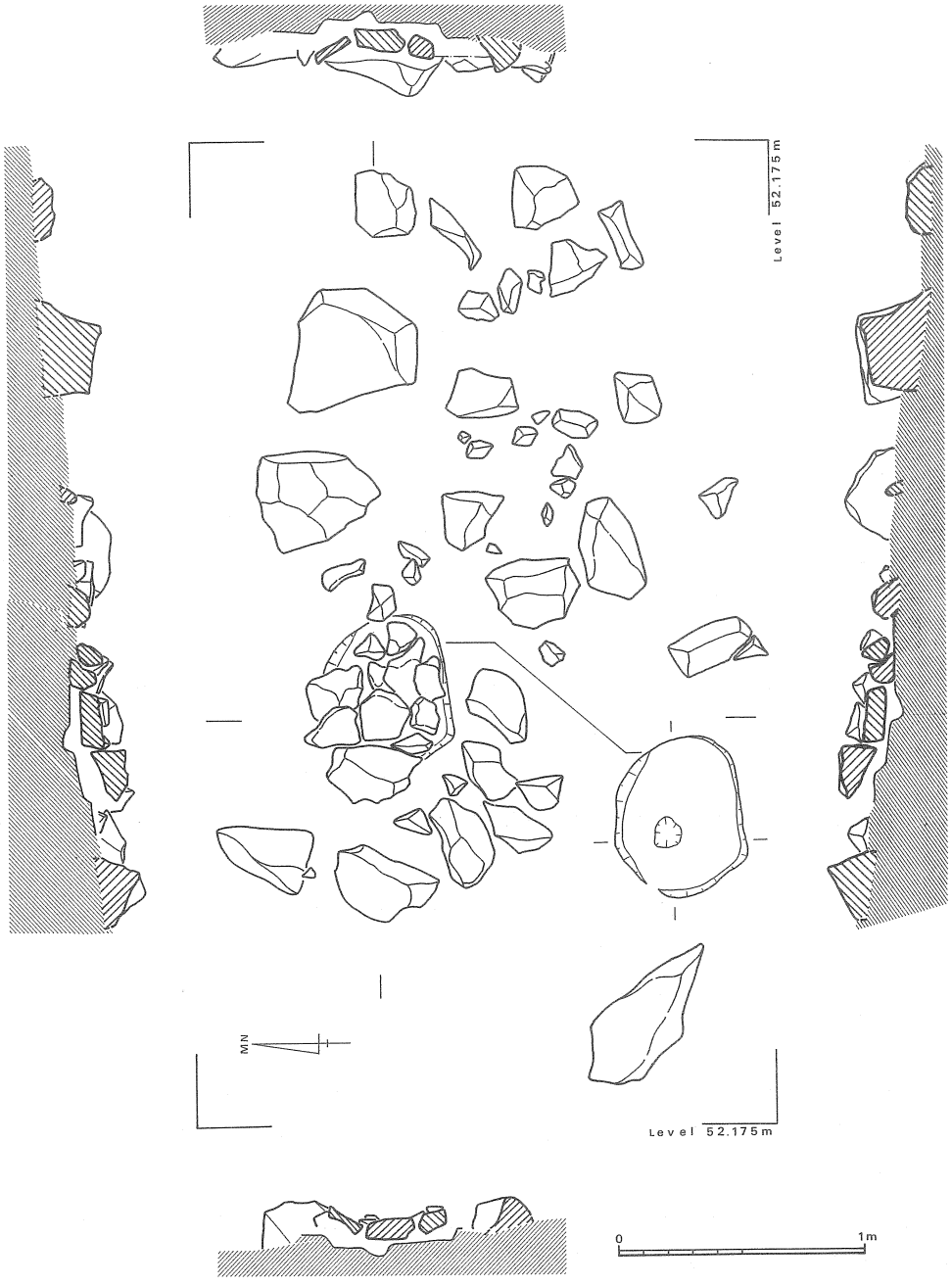
当該集石遺構は近年，本県においても大規模調査の結果類例を増しつつある。本市・中核工業団地内遺跡において，縄文時代早期末～前期にかけて集石遺構および炉穴等がかなりの基数検出されている[註1]。規模・形態において数タイプに分類でき，機能的にも幾つかに類別できるようである。

本遺跡においては一基のみの検出であったが，焼土塊の遊離，遺物分布との隔絶が認められる。この現象が遺跡構造の一類型を示しているのか，今後類似遺跡の増加，分析により闡明化すべき要素を有している。

一遺跡内における遺物分布の分析，及び集石遺構との結合，一定地域内における河川，湧水地点等を媒介とする遺跡の在り方，つまり微視的分布から概念的分布，巨視的分布と高次元化することにより初めて人間行動の実体が明らかになるものと考えられる[註2]。

註１　長崎県文化課　副島和明氏のご教示による。

2　麻生　優　　『「原位置」論序説』　上代文化　第38輯　昭和44年
〃　　『「原位置」論の現代的意義』　物質文化　No.24　昭和54年



第15図　E－10G. 集石遺構実測図（S－1/30）

4．石　　器

ナイフ形石器（第16図１－５，図版14－１）

１は黒燿石の縦長剥片を素材としておりバルブは残っている。左側縁と右側縁中位まで，主要剥面方向からのブランティングを施す。また，刃部は剥片の鋭い縁辺を利用している。完形であり断面悌形を呈す。Ｅ－５ G.出土。２は一部赤色を混える黒燿石の縦長剥片を素材としている。先端部を背面→正面の力で折損している。ブランティングは左側縁のみに正面・背面の両側から施す。刃部は剥片の鋭い縁辺部を利用しており使用痕が認められる。断面三角形を呈す。Ｈ－５ G.出土。３は良質の黒燿石を素材とする。先端部を背面→正面の力で折損している。ブランティングは右側縁と左側縁中位まで施し，背面の基部加工も認められる。断面悌形を呈す。Ｄ－５ G.出土。４は良質の黒燿石を利用しているが，先端部を折損している。左側縁と右側縁全体をブランティングしたものと思われる。断面悌形を呈す。Ｈ－７ G.出土。５はナイフ形石器の基部と思われ，左側縁にブランティングを施す。背面→正面の力で折損。良質の黒燿石を素材としている。Ｈ－７ G.出土。

台形様石器（第16図６－８，図版14－１）

６は良質の黒燿石を素材としている。素材は横位に使用し，バルブは切断，除去されている。左側縁はブランティング，右側縁は正面→背面の力で折断，また正面は右側縁より調整剥離を加え，厚さを減じている。正面下部ガジリ。表採。７は良質の黒燿石縦長剥片を素材とし縦位に使用。正面は周縁より平担剥離を全体に加える。また背面にも大きな剥離面を２枚残し，縁辺は調整を加える。刃部先端ガジリ。Ｄ－４ G.出土。８は良質の黒燿石を素材としており，左側縁にブランティングを施す。刃部と右側縁に使用痕が認められる。Ｅ－４ G.出土。

細石刃（第16図９・10　図版14－１）

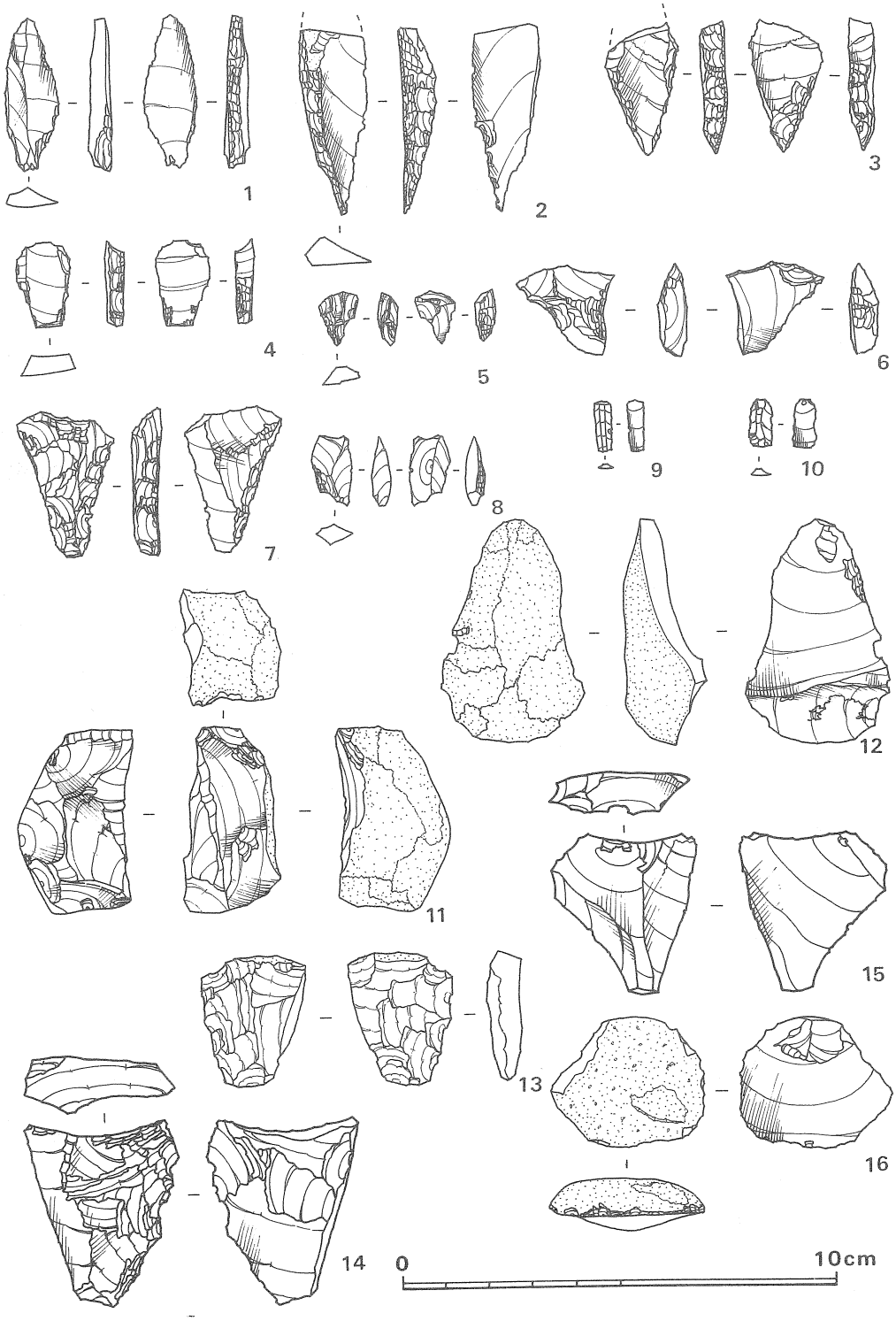
９・10ともに良質の黒燿石を素材とする。ともに，正面には三条の剥離痕を残す。９は頭・尾部を折断する。Ｅ―４ G.出土。10は尾部を折断。Ｄ－４ G.出土。

石核（第16図11・12　図版14－１）

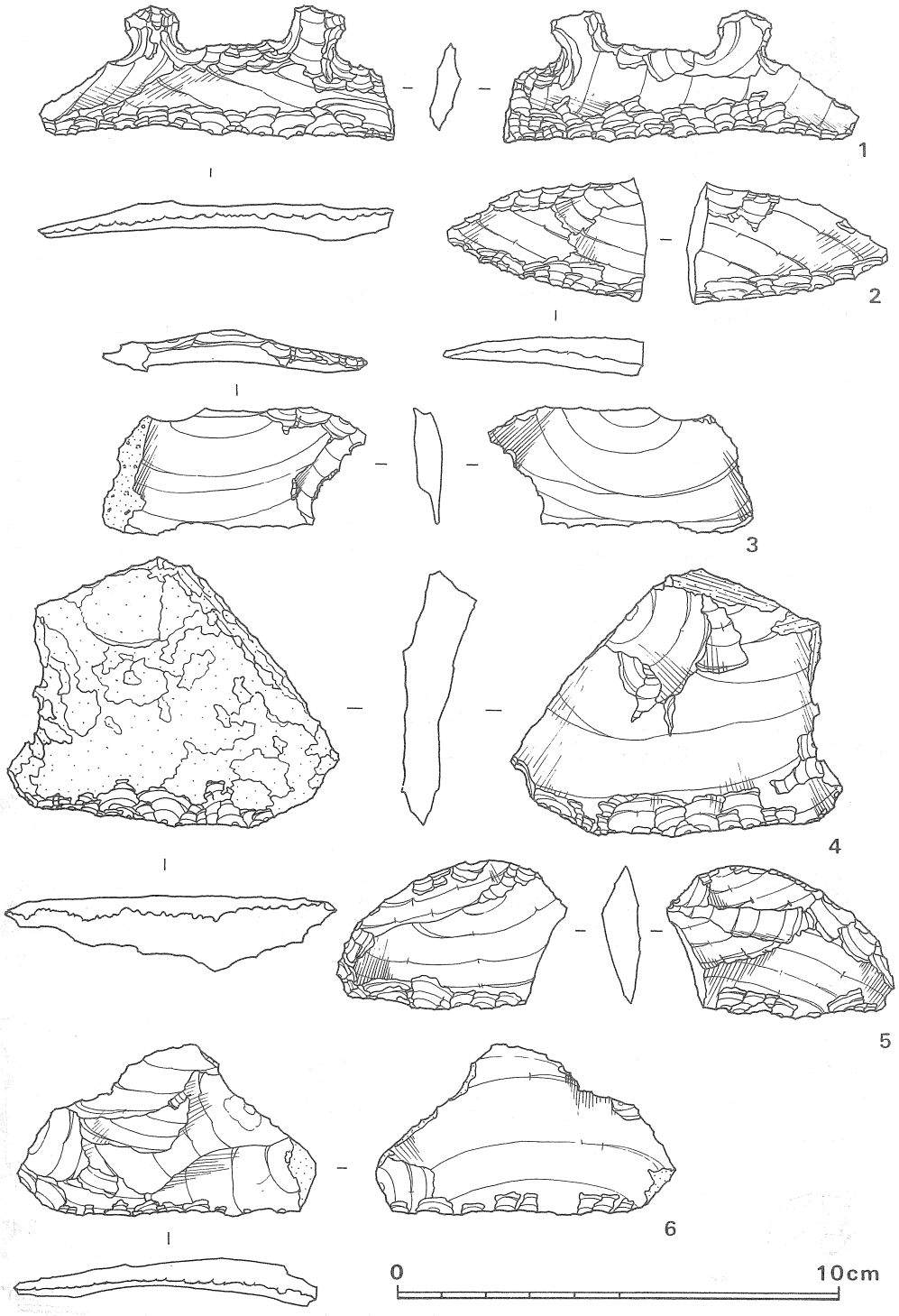
小形の石核で黒燿石を素材としている。２面の剥離面を持つが，それぞれ打面調整は施さない。また他面はそれぞれ自然面を留める。Ｅ－３ G.出土。12は黒燿石を素材としている。ネガティブ・バルブを留め打面は狭少である。下端部を右方向からの加撃で剥片を剥離している。現存２枚の剥離面が観察される。打面の調整は施していない。Ｄ－４ G.出土。この他，包含層及び表土より10点ほどの出土があるが，全て小形のものである。打面調整を施さないこと，打面転移を行なわないことで共通しているようだ。

剥片・砕片（屑片）（第16図15　第18図22　図版14－２）

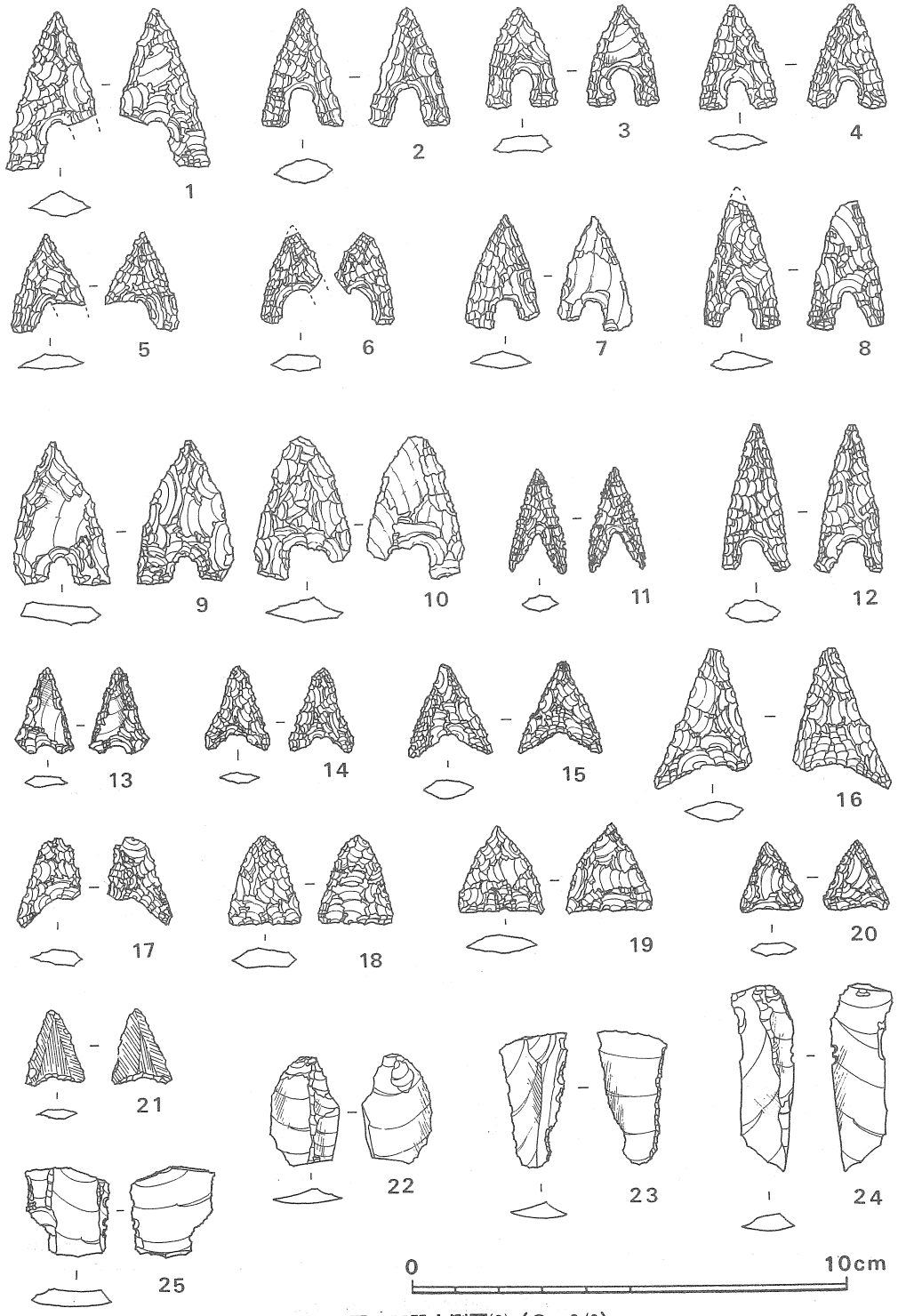
第２図15は黒燿石剥片で正面に３枚の剥離面を有し，打面調整は施されている。Ｄ－4G .出



第16図　石器実測図(1)



第17図　石器実測図(2)（S－2/3）



第18図　石器実測図(3)（S－2/3）

土。この他，206点の剥片が検出されているが形態は極めて不揃いで一定しておらず，また剥片にしては小形にすぎる感を受けるものが多く存在する。砕片(屑片）として232点を取り上げた。全て１～1.5cmほどを測る。第18図22は良質の黒燿石を素材としており正面に４枚の剥離面が残る。尾部は背面→正面の力で切断。打面は狭少である。Ｈ－６ G.出土。

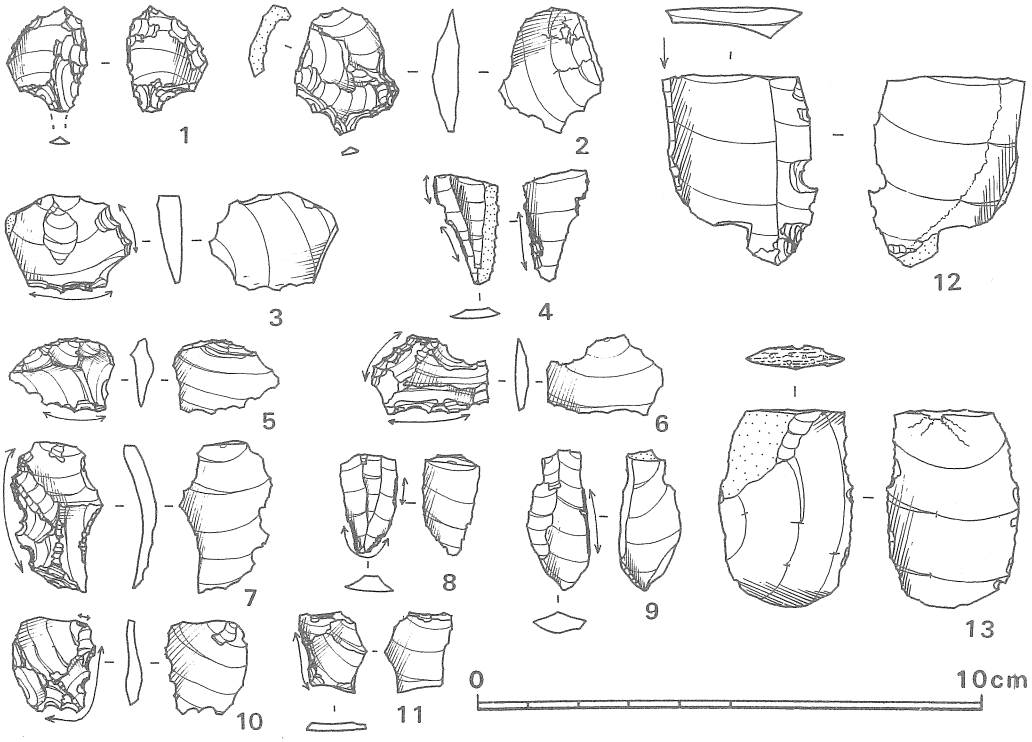
石器の素材となり得る幅，長さ，厚さを具えるものを剥片，石器の製作・加工途時において剥出されるものを砕片（屑片）という形で分類するとすれば，剥片の中でもかなり砕片(屑片）として分類すべきものがあるのかもしれない。

掻器（第16図16，図版14－１）

淡茶黒色を呈す黒燿石を素材とした円形掻器である。左側縁をガジっているが，打面部を除く周縁に刃部が形成されたものと思われる。円礫を使用し，表皮が全面を覆う。Ｆ－８ G.出土。

削器（第16図13・14，第17図１・２・４～６，第18図23・25，図版14－１，15－１・２）

素材とされた剥片の大きさ，その使用法，施刃の方法に差異を認める事ができるが，剥片の縁辺に刃部を作出したものをまとめた。第16図13は全面に荒い調整剥離を両面から施している。14は分厚い剥片を使用し，その一側縁に施刃。第17図１，２は石匙と呼称されるもので，ほぼ全周を両面より調整している。１は２個のツマミ部を作出。４・６は剥片の一側縁に両面より調整を施す。また５は剥片のほぼ全周に両面より施刃。第18図23は縦長剥片の一側縁に両面よ



第19図　石器実測図(4)（Ｓ－2/3）

り施刃。25は片面のみの施刃。素材は安山岩の剝片を多く使用しているが，第17図４，第18図23，25は黒燿石を使用。第16図13はＦ－２Ｇ.，14はＥ－４Ｇ.，第17図１はＥ－５Ｇ.，２は表採４はＤ－４Ｇ.，５はＦ－４Ｇ.，６はＧ－２Ｇ.，第18図23はＤ－５Ｇ.，25はＨ－６Ｇ.出土である。

使用痕のある剝片（第17図３，第18図24，第19図13，図版16－１・２）

第17図３は黒燿石を素材とした横広の剝片で右縁に刃こぼれを認める。打面部は除去されており，一部自然面を残す。Ｆ－３Ｇ.出土。第18図24は黒燿石刃器状剝片で右側縁に刃こぼれを認める。打面調整は施していない。Ｃ－４Ｇ.出土。第19図13はサヌカイト製剝片で正面に一部自然面を残す。左・右両側縁に刃こぼれを認める。Ｈ－６Ｇ.出土。

石鏃（第18図１～21　図版16－１・２）

25点を検出，表採したが，このうち21点を図示した。形態，技法の上から３つに分類できる。

Ｉ類（１～17）浅深の差はあるが，各資料ともに基部に抉りをもつものである。この中，１～８は特に抉りが深く，所謂鍬形鏃と呼称されているものである。抉り部末端は細かい調整を施しているが，彎曲部は２～３回の加撃で作出している。11は両側縁を鋸歯状に作出。鋭い脚端部，深い抉りを有つ。14は両側縁が若干内彎して先端部に到る。素材は，７，10が安山岩を使用しており，他はすべて黒燿石である。１，４，７はＤ－４Ｇ.，５，17はＤ－５Ｇ.，３，14はＥ－３Ｇ.，３はＥ－４Ｇ.，６，15はＥ－５Ｇ.，８はＦ－８Ｇ.，２はＧ－３Ｇ.，10はＧ－４Ｇ.，９はＨ－５Ｇ.　出土で12，13，16は表採資料である。

II類（18～20）基部は平坦に作出されており，三角形状を呈するものである。周縁からの加工は入念である。共に黒燿石を素材としており，すべて完形である。18はＧ－４Ｇ.，19は表採，20はＥ－４Ｇ.の出土である。

III類（21）磨製の石鏃である。丁寧に磨かれており，表裏ともに僅かに稜をなしている。小形のもので周縁に加工痕を若干残す。黒燿石製で，Ｄ－５Ｇ.の出土である。

以上，３つに分類したが，使用によると思われる折損はＩ類のみに認められる。脚を折損するもの（１，５，６，13），先端部を折損するもの（５，６，８，17）があり，この中６は両位ともに切損している。

彫器（第19図12，図版17－１・２）

彫器は黒燿石剝片を素材とし，切断後，単打の彫刀面を作出。１号土壙覆土中よりの出土である。他に単打の彫刀面を有つ１例がある。

石錐（第19図１・２　図版17－１・２）

１はチャートを素材としたもので，一方は剝片の縁辺を使用して調整を行い，他方はノッチによって尖端部を作出。表採。２は未調整打面より剝出された横広の剝片の一部に，２つのノッチにより尖端部を作出している。黒燿石を素材としている。Ｆ－３Ｇ.出土。

二次加工のある石器（第19図３～11　図版17－１・２）

すべて黒燿石を素材としている。不定形の剝片を使用しており，微細な刃部を複数ヵ所有つ

ものを一括した。主要剝離面からの加工が多いが，４のように両面に及ぶ例もある。削器として分類すべき処であるが，素材の用い方，施刃の在り方，複数ヵ所に刃部を有つことなどから一応削器とは別に分類した。３はＢ－３Ｇ.，４はＤ－４Ｇ.，５はＦ－２Ｇ.，６はＥ－３Ｇ.，７はＦ－３Ｇ.，８はＧ－４Ｇ.，９はＤ－５Ｇ.，10はＨ－６Ｇ.，11はＤ－５Ｇ.出土。

５．土器（第20・21図　図版18）

調査により検出された土器は，ドット・マップにより取り上げた約500片、及び微細な実測図により取り上げた土器集中地点４ヵ所である。大多数が土師器であり中に数片の弥生式土器が存在するが全て小破片であり原形に復するものは存在しない。また第一次調査時に得られた押型文土器の類や縄文式土器は石器を除いて全く検出されなかった。

以下，復元実測により図示した資料について説明を加えよう。

甕形土器（第20図１～５）

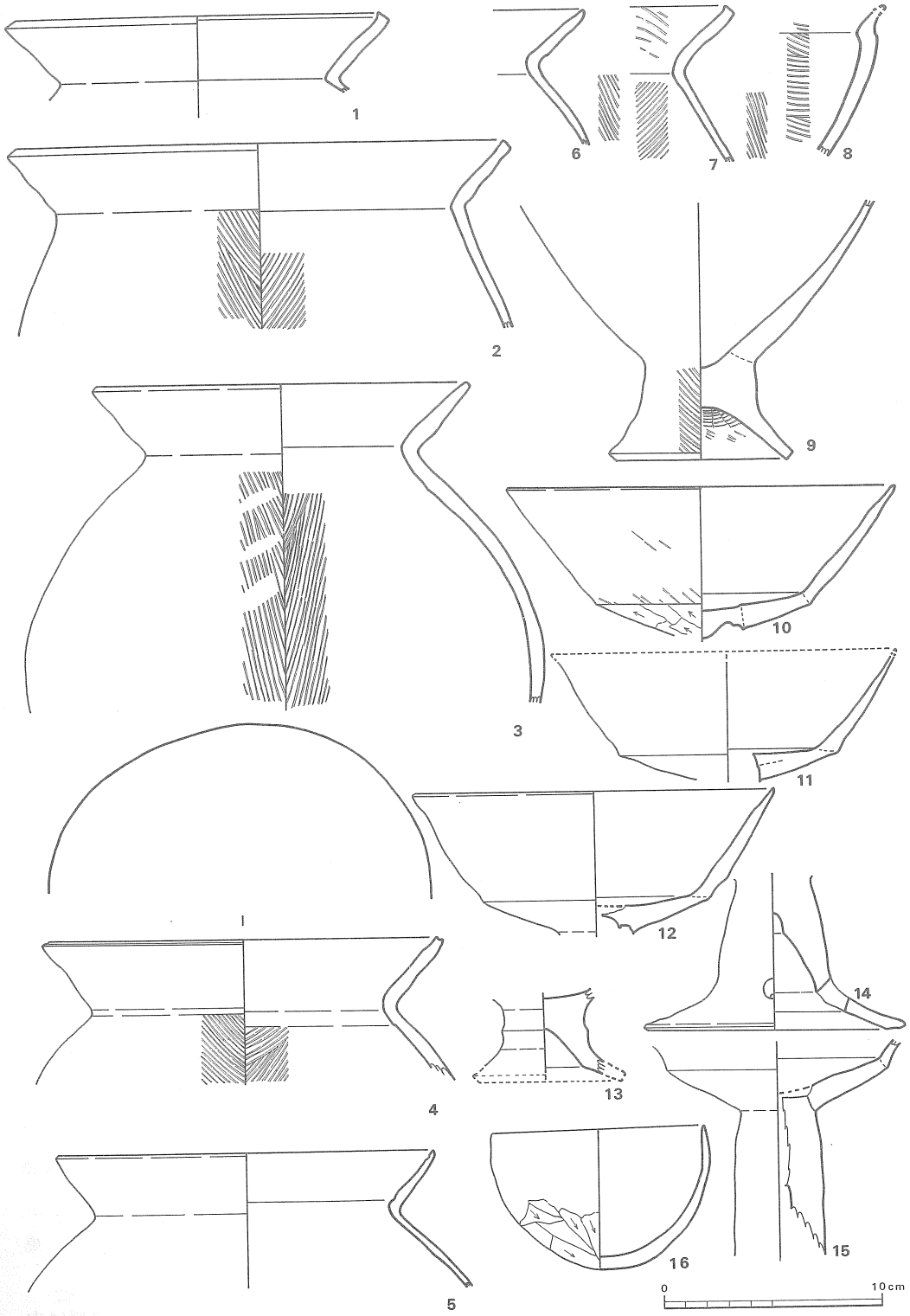
口縁部から胴上半部にかけてのもので，主として口縁部の形態等により３類５種の分類が可能である。全てＨ－８Ｇ.出土である。

Ⅰ類（１）　胴上半部から反転して「く」字状に外反する口縁部を有するもので，口唇部は内方上位につまみ上げ気味におさめており，内面に稜線が入る。口縁部は内外面ともにヨコナデ仕上げ。頸部以下つまり胴上半部は内面へラケズリ（？）により２㎜前後と他の土器に比し薄く仕上げられている。外面はナデ仕上げ。色調は淡茶色を呈し，胎土は１～２㎜大の石英粒が目立つ。焼成は良好。復元口径約20㎝を測り，1/2ほどを残す。Ⅱ・Ⅲ類及び他器種の土器に比し，胎土・焼成・色調において若干趣きを異にしている。

Ⅱ類（２・４・７）　胴上半部から「く」字状に外反する口縁部を有するもので，口縁部は僅かに凹凸を見せながら口唇部に到る。口唇部は平坦におさめる２・７をⅡａ類，ナデにより若干中凹み気味におさめる４をⅡｂ類として区分できる。

２の胴部はほぼ均一で，内外面共にハケにより仕上げる。口縁部内外面共にヨコナデ仕上げ。色調は赤褐色を呈し，胎土は細砂粒を含むが精良。焼成は良好である。口径約23㎝を測り1/4程を残す。７は胴部ほぼ均一で，口唇部が僅かに上方に突出するクセをもつが意図的につまみ上げたと言うよりナデにより結果的に突出したもののようである。胴部内外面はハケにより仕上げ，口縁部内面にも僅かにハケ目痕が残る。爾後外面と共にヨコナデ仕上げ。色調は外面淡茶褐色，内面赤褐色を呈し，胎土は細砂粒を含むが精良である。焼成は良好。小破片のため口径不明である。４は胴部ほぼ均一で内外面共にハケにより仕上げている。口縁部内外面共にヨコナデ仕上げ。色調は外面淡茶褐色，内面赤褐色を呈す。胎土は細砂粒を含むが精良であり，焼成良好である。口径約18㎝を測り1/2ほどを残す。成形時のヒズミがかなり顕著である。

Ⅲ類（３・５・６）　胴上半部から「く」字状に外反する口縁部を有するもので，口縁部は中



第20図　土器実測図(1)（S－1/3）

膨らみ，或いは僅かに凹凸を見せながら口唇部に到る。口唇部は丸くおさめる３・６をⅢａ類尖り気味に丸くおさめる５をⅢｂ類として区分できる。

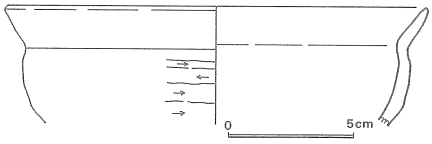
３は球形を主する胴部を有すると推され器壁はほぼ均一である。内外面共にハケにより仕上げている。頸部は内面ヨコナデ，外面ハケのちヨコナデにより仕上げる。口縁部は内外面ともにヨコナデ仕上げ。色調は赤褐色を呈し，胎土精良である。焼成良好。口径は約17cm，胴部最大径24.7cmを測る。約1/2残存。６は胴部ほぼ均一で外面ハケにより仕上げるが，内面は不分明である。口縁部は内外面共にヨコナデ仕上げ。色調は赤褐色を呈し，口縁部外面に二次的な煤が一部付着している。胎土は精良であり，焼成良好。口径は小破片のため不明。５は胴部の厚さ約３mmと薄くほぼ均一。外面はナデ仕上げ。内面はナデと推されるが不分明。口唇部下内面にはヨコナデにより若干の中凹みが認められる。内外面共にヨコナデ仕上げ。色調は赤褐色を呈する。胎土は細砂粒を含むが精良である。焼成良好。口径約17cmを測り1/5残存。

鉢形土器（８・９・第21図）

形態の上から３類に分類可能である。

Ⅰ類(8)　ほぼ扁球形の胴部に短かく外反する口縁部が付くもの。

Ⅱ類(9)　脚付の鉢形土器と思われ，現在胴下半部まで残存している。



第21図　土器実測図(2)（S－1/3）

Ⅲ類（第21図）　半球形の胴部に外上方に反転する口縁部が付くもの。

８は口縁部から胴部にかけての破片で，口唇部を欠損している。胴部はほぼ均一に仕上げられ，口縁部は反転してつぼまり気味に終わりそうだ。胴部外面はヨコナデ仕上げ，内面はハケにより仕上げる。口縁部は内面ハケのちナデ仕上げ，外面ヨコナデ仕上げ。色調は茶褐色を呈す。胎土は細砂粒を含むが精良である。焼成良好。口径は小破片のため不明。表層出土。９は胴上半部から口縁部位を欠損している。脚部は脚端に向って漸次厚さを減じ，端部は平坦におさめている。胴部は接合部位より次第に厚さを減じている。脚部は外面ハケにより仕上げており，端部はナデ仕上げ，内面はクモの巣状を呈するハケによって仕上げる。体部の調整仕上げは不分明である。色調は淡茶褐色を呈す。胎土は精良。焼成良好。脚部底径8.5cm，現存高12cmを測る。Ｈ－８Ｇ.出土。第21図は口縁部から胴部にかけての破片である。胴部はほぼ均一に仕上げ，反転して外反する口縁部が付く。口唇部は丸くおさめている。調整は，胴部外面横方向左右からのヘラケズリ，内面ヨコナデ仕上げ，口縁部内外面共にヨコナデ仕上げ。色調は赤褐色を呈す。胎土精良。焼成良好。口径約17cmを測るが約1/7しか残存しておらず不分明である。Ｈ－７Ｇ.出土。

高杯形土器（10～15）

復元実測可能であった高杯杯部は，相似た形態を示しており同一類としてまとめることができる。ここでは脚柱部の形態により３類に分類した。

Ⅰ類(13)　短かい脚柱部を有するもの。

Ⅱ類(14)　脚柱部中位がエンタシス状に中膨らみするもの。

Ⅲ類(15)　脚柱部がエンタシス状に中膨らみすることではⅡ類と同じであるが，脚柱内部が充塡されており中実のもの。

杯部と脚柱部の接合法はホゾ挿入式になる例が多く見受けられる。色調は13の淡黄褐色を除けば全て赤褐色～赤黄褐色を呈している。胎土は13を除けば水簸した粘土を使用したと推され全て精良である。また焼成も全て良好である。

10は杯底部の屈折がはっきりしており杯部は外上方へ大きく広がる。杯底部外面はササラ状の工具，若しくはヘラによって中心から周辺に向ってケズリを施している。杯部外面はハケの後ヨコナデ仕上げ。杯部内面から底部にかけてはヨコナデ仕上げ。口径18cm，杯部器高７cmを測る。Ｈ－５G.出土。11は表層出土のもので10と相似た形状を示す。調整は器表が荒れているため不分明。復元口径16cm，同器高６cmを測る。12は杯底部の屈折が明確で，杯部は10と同様接合部より外彎，内彎，外彎して口唇部に到る。口唇部は尖り気味に丸くおさめる。杯底部及び杯部内外面ともにヨコナデ仕上げ。口径は16.5cm，杯部器高6.5cmを測る。Ｈ－５G.出土。13は杯底部から脚柱部にかけてのもので脚端部を欠損している。ほぼ中位には強いヨコナデにより稜線が３本入る。調整は内外面共にヨコナデ仕上げ。Ｈ－６G.出土。14は脚部のみでエンタシス状の脚柱から大きく広がる脚裾にかけてのものである。脚端部は丸くおさめている。反転・屈折部位に３孔を穿つ。調整はヨコナデ仕上げと推される。底径12cm，脚部器高7.1cmを測る。Ｈ－８G.出土。15は杯底部位と脚柱部のもので半欠損している。調整手法は器表が荒れているため不分明である。Ｈ－５Ｇ出土。

盌形土器(16)

半球形を呈し，口唇部は若干内彎しており尖り気味に丸くおさめる。胴部外面上半及び内面はヨコナデ仕上げ。以下は上から下へのヘラケズリを施す。色調は赤褐色を呈する。胎土は細砂粒を含むが精良である。焼成良好。口径9.8cm，胴部最大径10cm，器高6.5cmを測る。約1/2ほど現存。Ｈ－６Ｇ.出土。

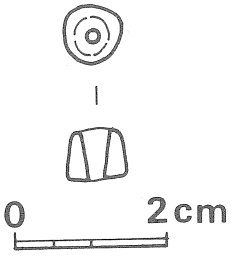
６．その他の遺物（第22図，図版18）

表層土より多くの遺物が遺構と遊離した状態で検出された。

近世陶磁器，瓦等の破片がその主たるものである。

ここでは，Ｈ－６G.において褐色土面より出土した小玉を取り上げる。

使用された石材は軟玉と推される。径６～7.5mm，孔径２～3.5mm，厚さ6.5mmを測る。孔は一方向からのみ穿たれ，紐ズレを認める。一個のみの検出であり，多くを語ることはできないが遺物の出土状態，特に高杯の出土状態及び土器の組成の貧弱さ，遺跡立地の在り方等を勘案すると，埋葬若しくは祭祀に関連があるものか，と推量される。



第22図　小玉実測図(Ｓ－1/1)

第V章　ま　と　め

最後に本調査において検出し得た遺物の中，特に土師器を抽出して検討し，まとめとしたい。

本遺跡から検出された土器は，土師器が大部分を占めている。甕形土器，鉢形土器，高杯形土器，盌形土器と器種的に少なく土器のセット関係について必ずしも十分とは言えない憾みを有つが，ここでは当土師器群の所属時期を考えてみたい。

甕形土器は口縁部及び口唇部の特徴から3類5種に分類可能である。Ⅰ類は「く」字状に外反し，直線的に延びる口縁部及び内側上方にツマミ上げる口唇部を有つ。内面は極薄に仕上げられており，ヘラケズリ技法が用いられたものと推されるが，叩き技法が用いられたか否か不明である。しかし，田中氏論文[註1]で指摘する通り「口縁部は『く』の字形に外反する。口縁端部は小さく上へつまみあげて，横になで，上方へ拡張した形になっている。端部内面の肥厚するものはない。」とする庄内式の特徴と，「端部のつまみあげをなでつけることによって布留式の甕の口縁端部の内面肥厚が発生すると考えられる。」とする布留式の特徴との差異よりすれば，当Ⅰ類は布留式以前の庄内式土器の範疇に入ると推される。この時期の資料は本県では検出例が少なく現在大堂遺跡[註2]にその類例を求めることができるようであり，今後の資料の増加を期待する処である。Ⅱ類は球形若しくは長胴形の胴部を有すると思われ，底部の形状は不明である。「く」字状に外反し，微妙な凹凸を見せ口唇部に到る口縁部を有ち，口唇部は平坦或いは中凹み状におさめる。Ⅲ類は扁球形の胴部を有すと推され底部不明。口唇部のおさめ方により2分類が可能である。このⅡ類，Ⅲ類は共に胴部内外面ハケにより調整している。Ⅰ類より新相を示しているが，内面ハケ調整は在来の技法を伝承しているものと推される。

さて，内面ヘラケズリ技法と内面ハケ調整が混淆する遺跡として今光遺跡，地余遺跡[註3]，有田遺跡[註4]，湯納遺跡[註5]等が在る。今光遺跡・地余遺跡においては「Ⅱ期(庄内式併行期)では出土土器群の中に外来系の新たに出現する時期で，……外来系の内面篦削りと在地系の内面刷毛と篦削りが共存する時期であることは明確のようである。」としⅡ期の庄内式からⅢ期の布留式まで存続している。有田遺跡では31街区，17街区共に両技法の甕形土器が検出されている。31街区出土土器を有田Ⅰ期とし，17街区出土土器を有田Ⅱ期として設定された。Ⅰ期は「著しく弥生的要素を失って斉一化の要素を示している。五領式の要素をもつとはいえ，和泉式に接近した時期に比定される。」とし，Ⅱ期は「一部第Ⅰ期に重複するもので和泉式文化期でもその前半に相当するであろう。」とされた。湯納遺跡においては，その出土土器群から湯納Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ式が設定され，Ⅲ式まで両技法の混淆が認められる。有田遺跡との関係では有田Ⅰ期を湯納Ⅱ式よりやや新しく，有田Ⅱ期を湯納Ⅲ式に相当するとされた。これらの成果により両技法の混淆は新来の技術として叩き技法とともに弥生時代終末期[註6]から始まり，(若干の地域差，時間差は考えられるが)布留式の新相の段階で終焉[註7]するものと考えられる。

以上によりII類，III類は内面ハケ調整法の残存，口縁部のおさめ方等により布留式の段階でも古相として把握できよう。

鉢形土器は3個体あり3種類に分類できる。I類は立花貝塚上層[註8]出土土器に類列が求められる。II類は脚台付の鉢形土器と推され，弥生時代からの遺存形態を示すものであろう。またIII類も同様，弥生時代からの系譜を引くものであろう。

高杯は杯部の形状において近似しているが，脚部にはバラエティーがある。II類，III類及び杯部は湯納D－5溝一括土器[註9]に類例がある。I類としたものはII類，III類に比し色調，胎土において著しく異なる。この短脚の高杯は本明石棺群出土土器[註10]に類例がある。

盌形土器は半球形で口縁部が若干内彎しており，黄金山古墳出土例[註11]に類似している。

以上により本遺跡出土土器群は，その出土状況より一括土器として把握でき，土器相により庄内式～布留式の古相の段階に比定できよう。

さて本県においては須恵器出現以前の所謂古式土師器の出土例[註12]は少なく，ために編年も完備されていない現状であるが，ここでは土器の流れを若干検討してみたい。

近年調査された大村扇状地に立地する黒丸遺跡[註13]では，良好な古式土師器が多数検出されている。旧河川内から検出されており布留式を中心とする時期のものであるが，Fig 48－14，Fig 50－21等は古く位置づけられそうである。また Fig 49－18等は大堂遺跡に類例が求められ新相を示している。当遺跡においても内面ヘラケズリ技法とハケ調整の両技法が混淆している。Fig 47－4の調整手法は，ハケ調整後ヘラケズリを施し，ナデによって仕上げている。Fig 48－9もほぼ同じ手法によっている。これらは在来のナデ・ハケによる技法から，熱効率の良さ，調整手法の簡略化をもたらす新来のヘラケズリ技法に移る過渡期の所産と考えられる。

このように各遺跡出土の土器により，大堂遺跡I類，本遺跡I類を構成する一群→本遺跡・黒丸遺跡の主体をなす一群→黄金山古墳出土土器群→大堂遺跡の新相を示す一群という変遷が現時点で考えられよう。だが大堂遺跡と黄金山古墳との間には1～2型式の間隙が存在するようである。

註

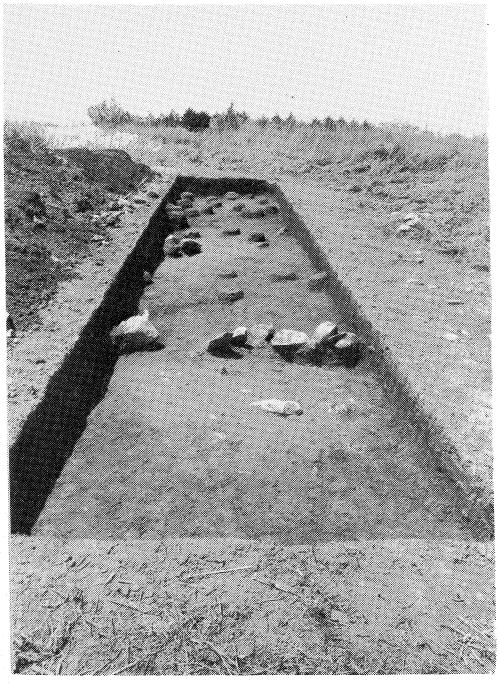
1．田中琢「布留式以前」考古学研究12－2　昭和40年
2．宮崎貴夫「大堂遺跡」長崎県文化財調査報告書第45集　昭和54年
3．佐々木隆彦他「今光遺跡・地余遺跡」昭和55年
4．鏡山猛　小田富士雄他「有田遺跡」昭和43年
5．栗原和彦他「湯納遺跡」今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第5集　福岡県教育委員会　昭和52年
6．叩き技法及び内面ヘラケズリ技法は新来の技術として弥生時代終末期頃から登場し始める。
井上裕弘他「門田遺跡・辻田地区の調査」山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第7集　福岡県教育委員会　昭和53年
小田富士雄他「狐塚遺跡」筑後市教育委員会　昭和45年
小田富士雄他「高島遺跡」古文化談叢第3集　九州古文化研究会　昭和51年
7．両技法混淆の終焉については一線で画すことは不可能であろうと思われるが，ここでは武末氏の言う「複合口縁壺，小形器台がなくなり，小形丸底壺の口径が胴部最大径よりも小さくなる，いわゆる和泉式の第III期」で終焉するものと解しておきたい。
武末純一「遺物の検討」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIX　福岡県教育委員会　昭和52年
8．註7と同
9．註5と同
10．昭和43年農免道路工事により石棺の発見がなされ，3基を調査した。弥生時代末～古墳時代初頭の所産である。
正林護「本明町石組埋葬遺構」長崎大学医学部解剖学第二教室　昭和43年
11．小田富士雄「長崎県大村市・黄金山古墳調査報告」九州考古学39・40　昭和45年
12．内藤芳篤他「深堀遺跡」人類学考古学研究報告第1号　長崎大学医学部解剖学第二教室　昭和42年
篠原遺跡　長崎市文化課　永松実氏のご教示による。
13．稲富裕和他「黒丸遺跡」黒丸遺跡調査団　昭和55年

図　版

1．平山遺跡Ｂ地点遠景（北側から）

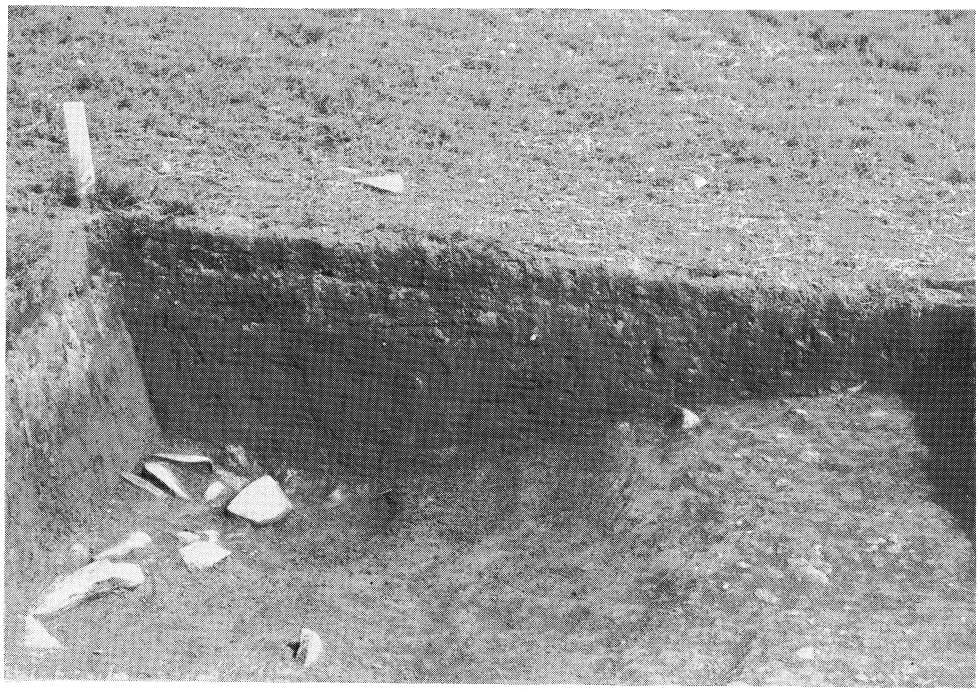
2．平山遺跡Ｂ地点近景（北側から）

１．第一次調査Ｄ－２Ｇ．遺物出土状況（東から）

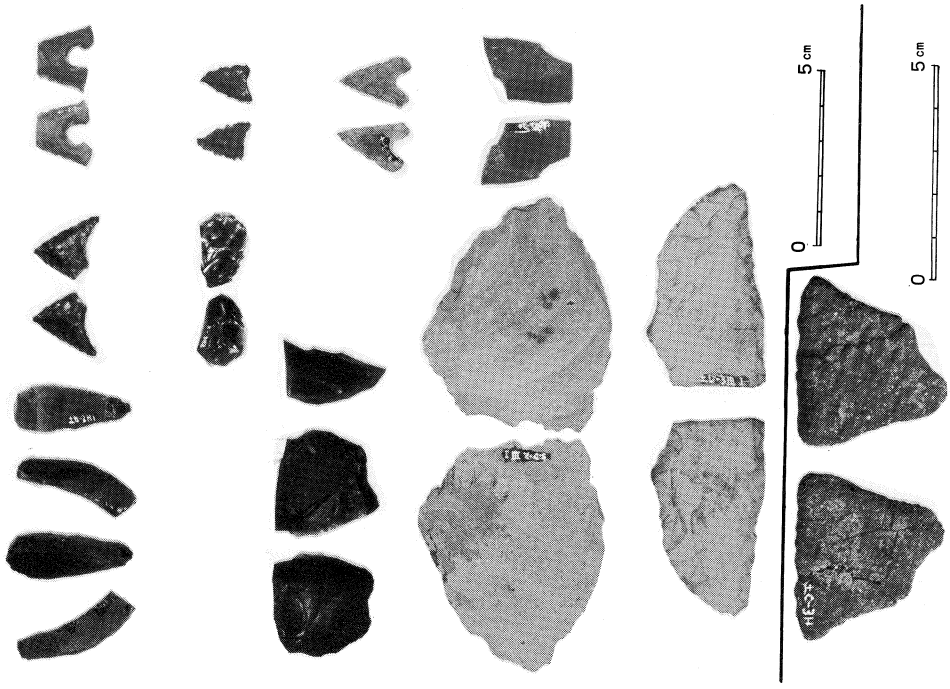


２．Ｃ・Ｄ－２Ｇ．遺物出土状況

３．調査風景



１．Ｄ－２Ｇ土層断面（北壁）

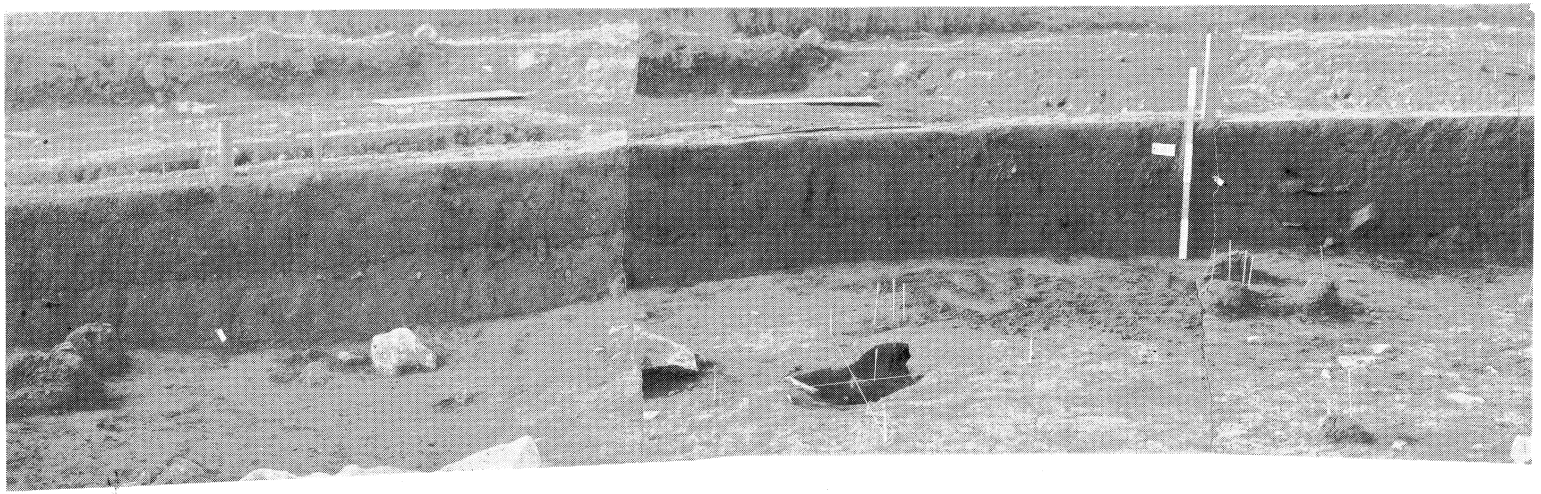


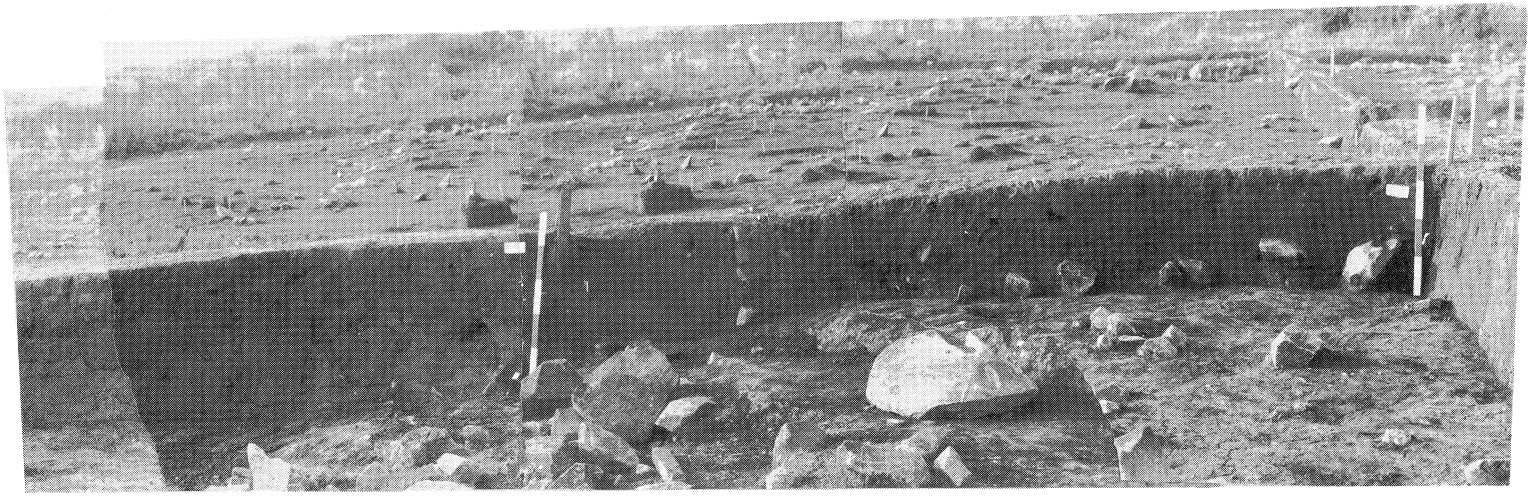
２．第一次調査出土遺物

図版４

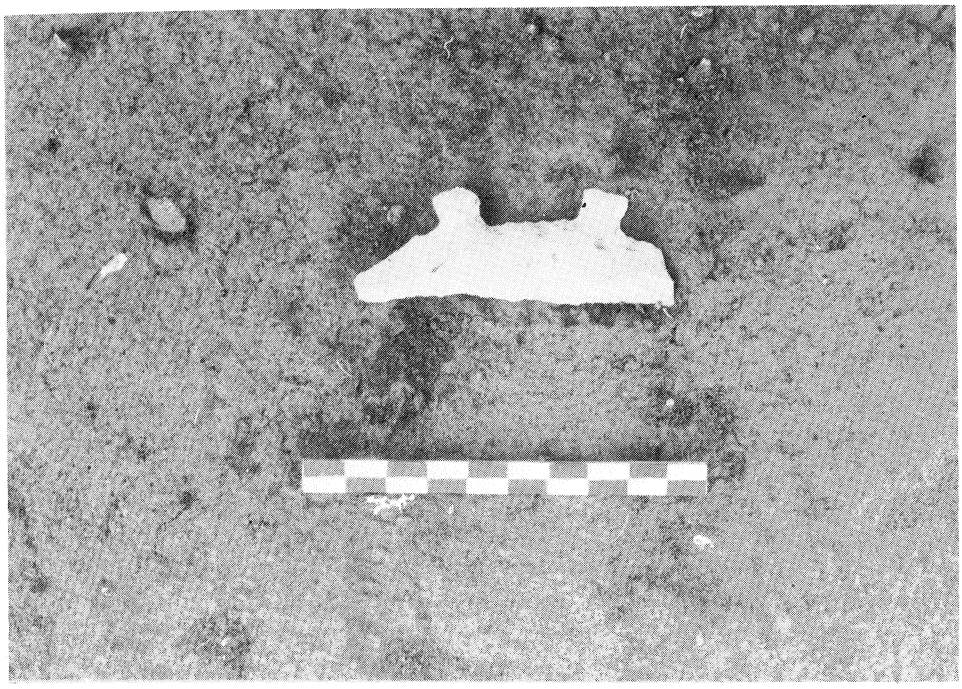
１．Ｌ－10Ｇ．土層断面（南壁）

２．Ｌ－10Ｇ．土層断面（西壁）

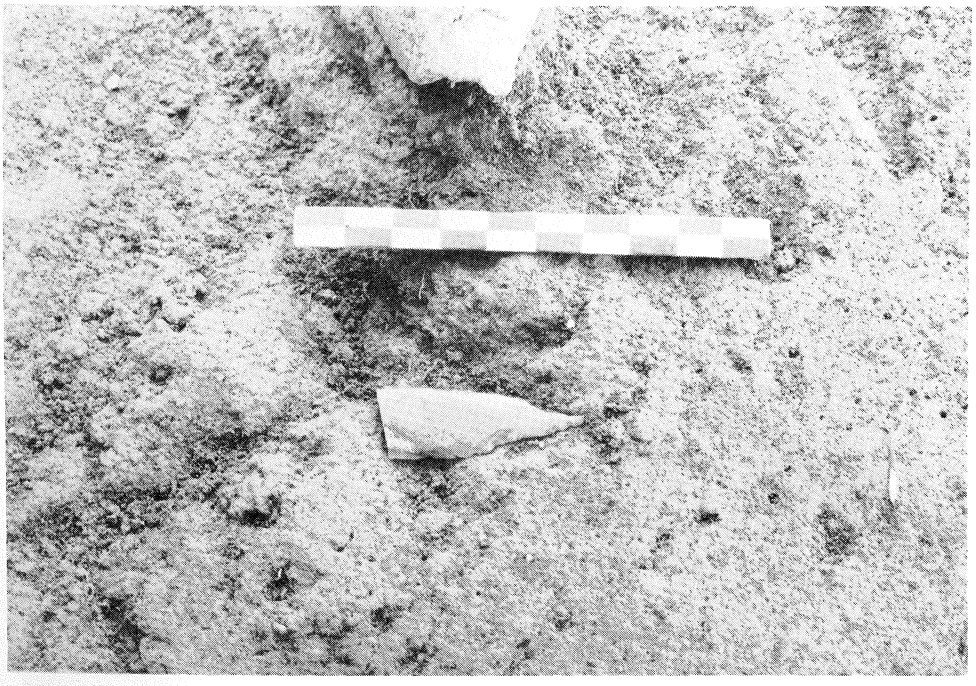




5・6列土層断面（北側から）

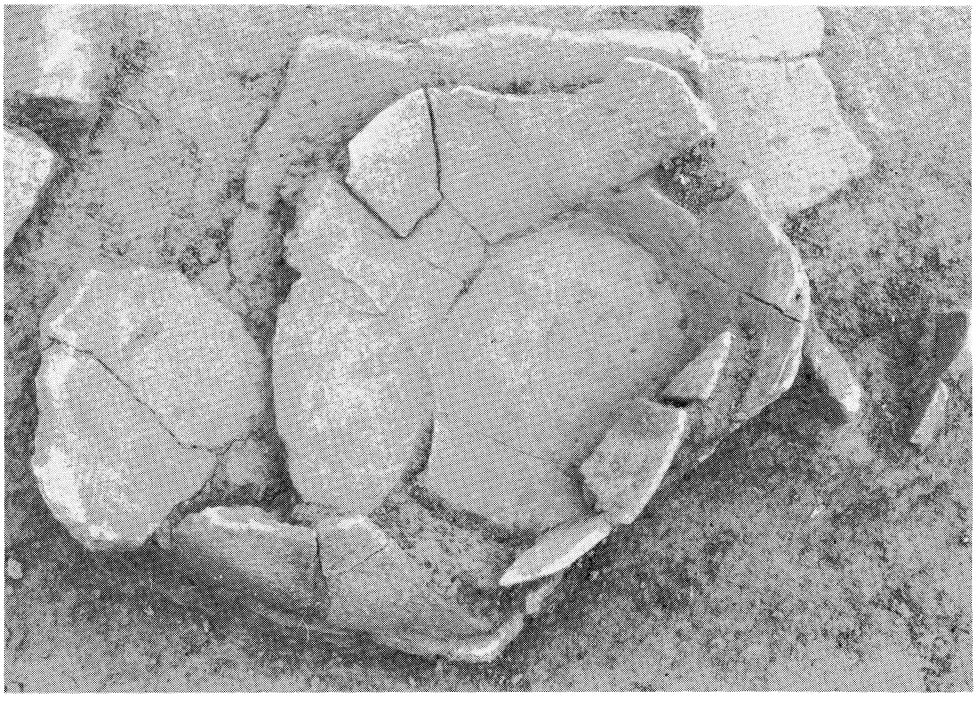


１．Ｅ－５Ｇ．石器出土状況

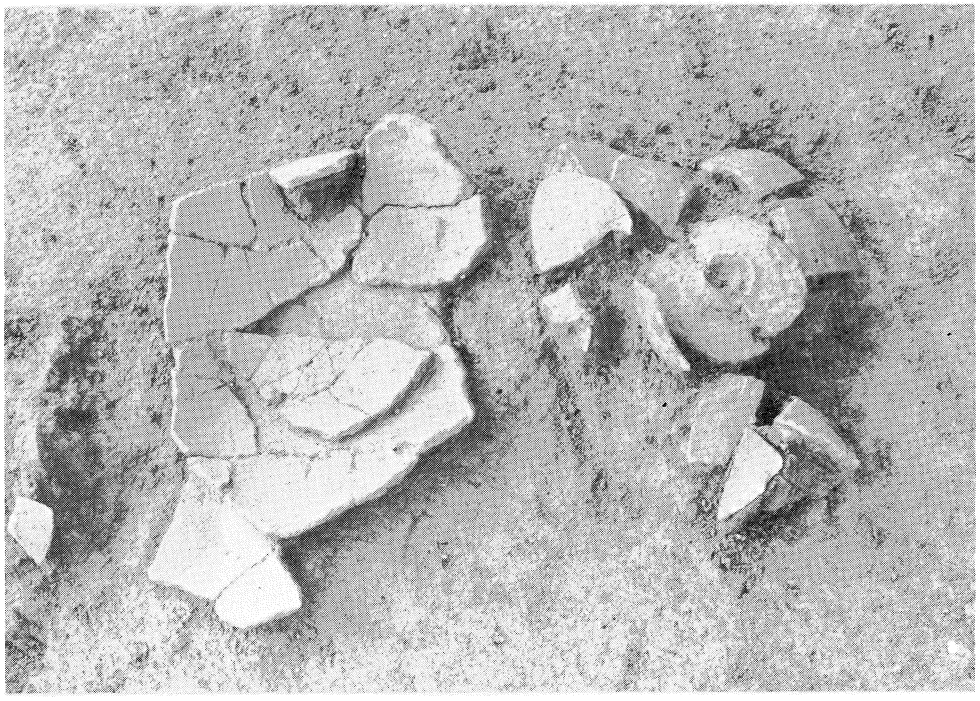


２．Ｈ－５Ｇ．石器出土状況

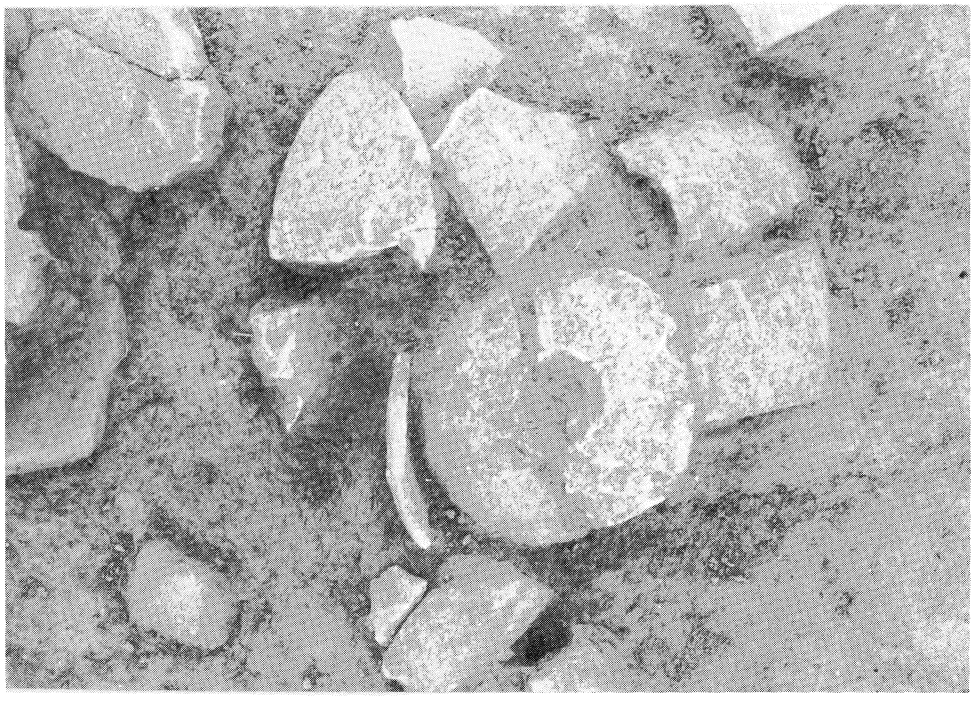
１．Ｈ－５Ｇ．土器出土状況



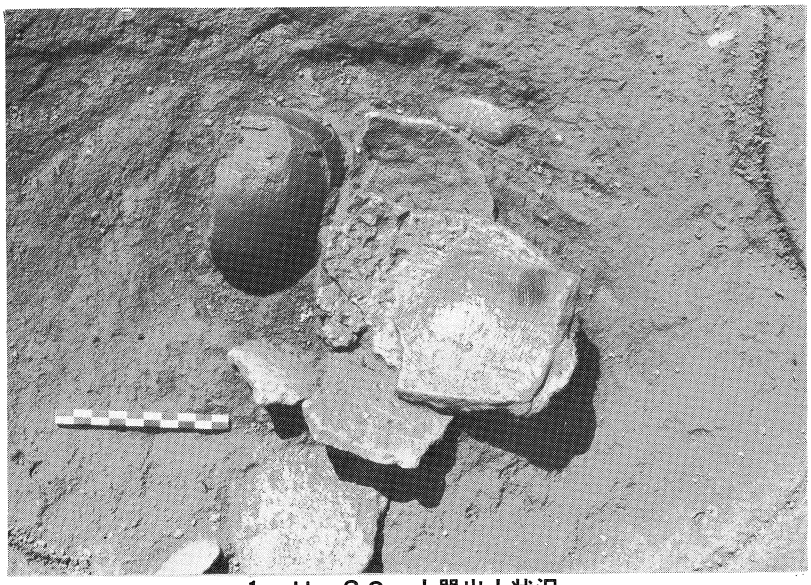
２．Ｈ－５Ｇ．東側高杯



1．H－5G．東側高杯除去後

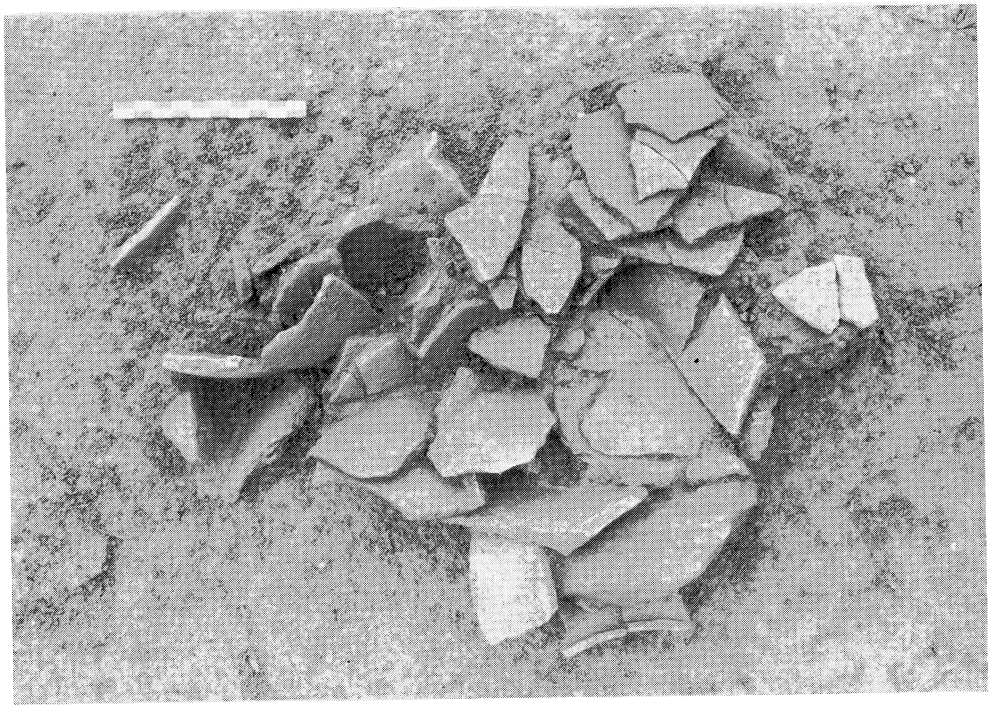


2．H－5G．西側高杯



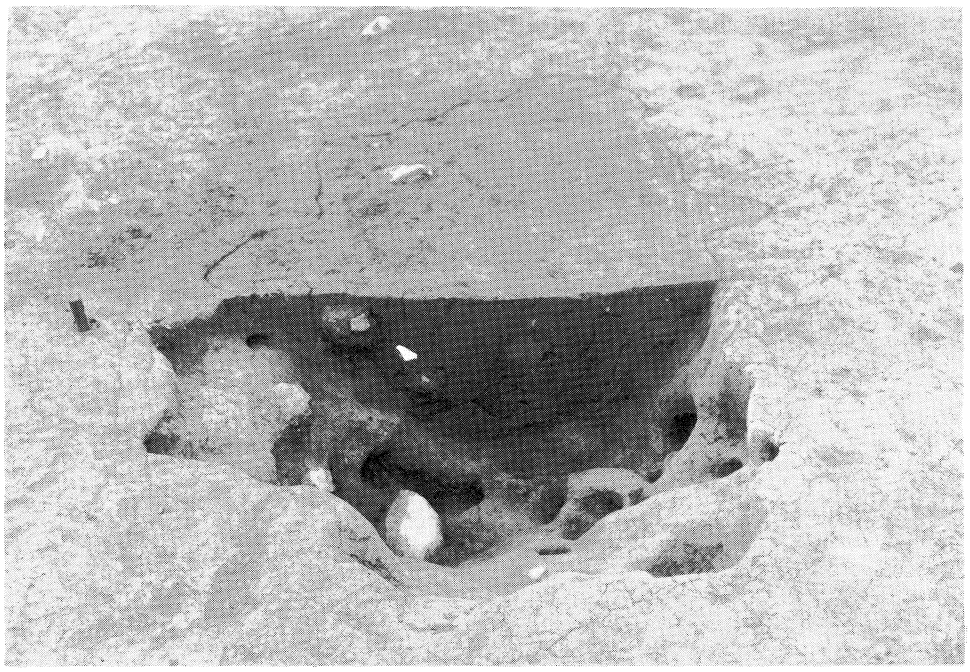
１．Ｈ－６Ｇ．土器出土状況

２．Ｈ－８Ｇ．土器出土状況

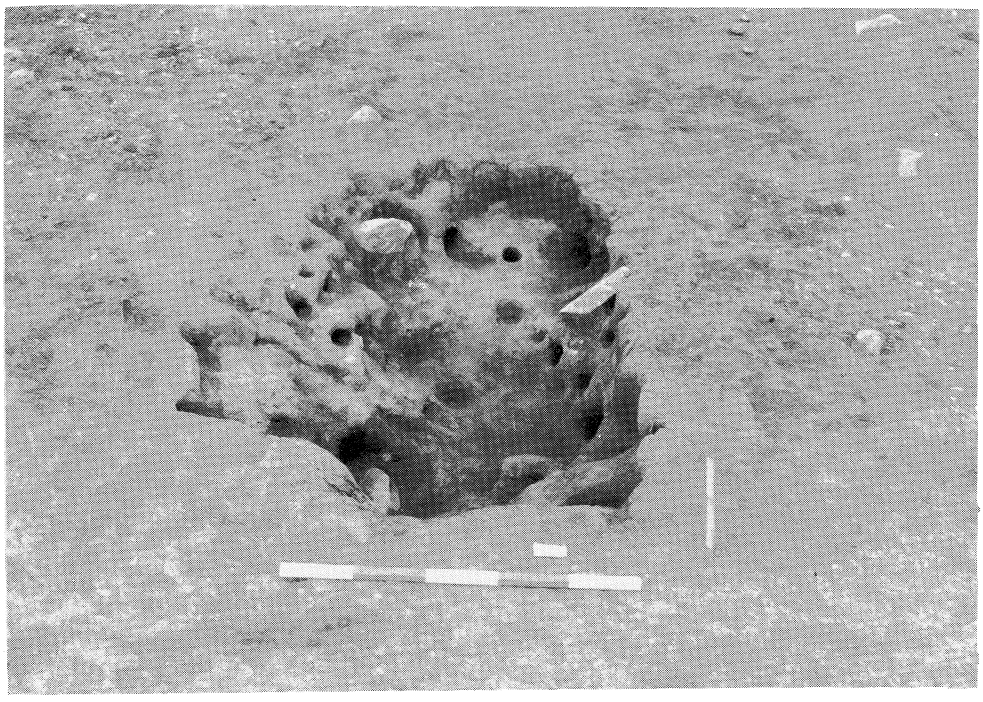


1．H－8G．土器出土状況（南側集中部）

2．H－8G．土器出土状況（北側集中部）

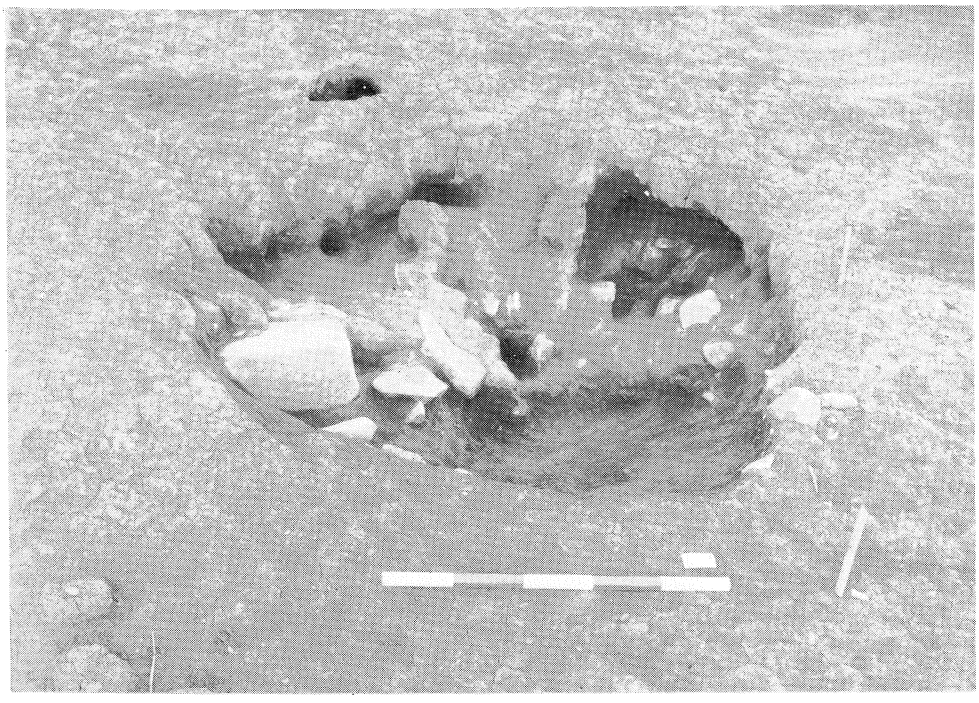


1．1号土壙土層断面（南側から）



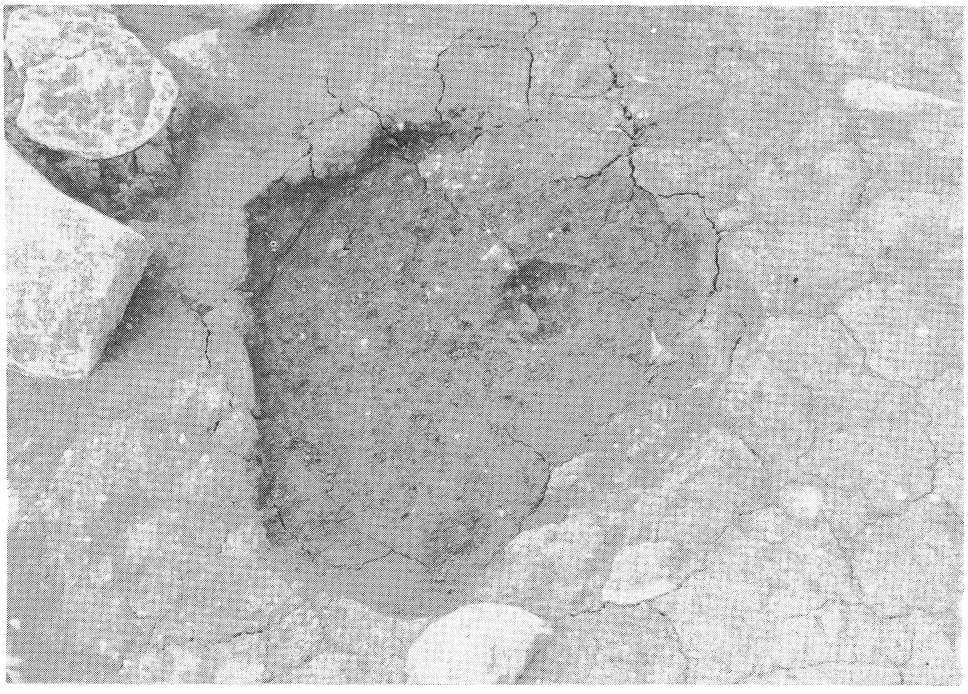
2．1号土壙掘り上げ後（南側から）

1．２号土壙土層断面（南側から）



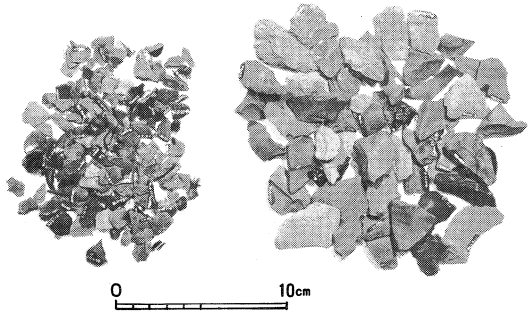
2．２号土壙掘り上げ後（南側から）

1．E－10G．集石遺構（東側から）

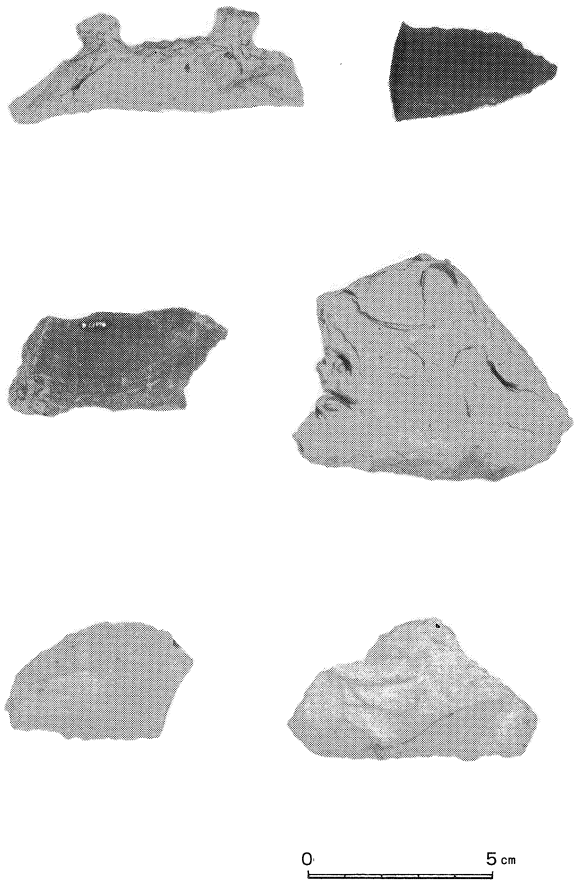


2．E－10G．土壙（石材除去後）

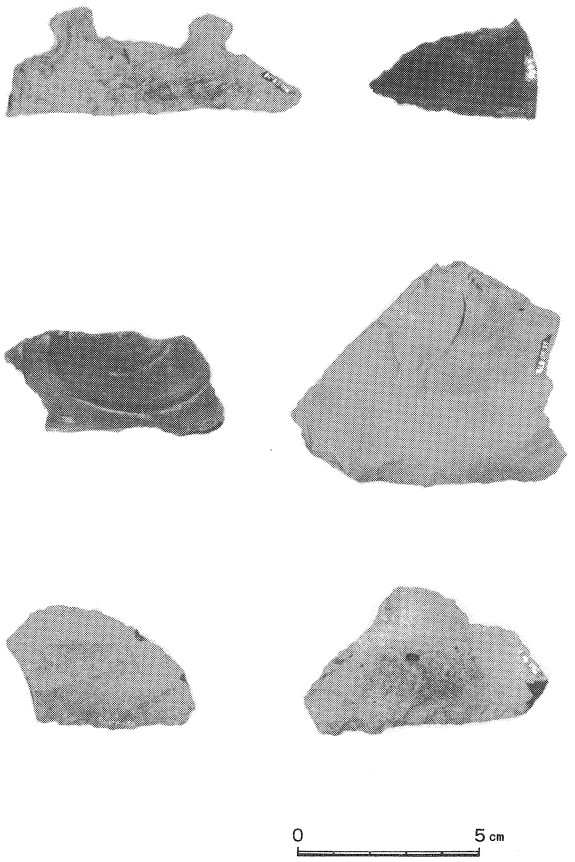
1．ナイフ形石器・台形様石器・石核ほか



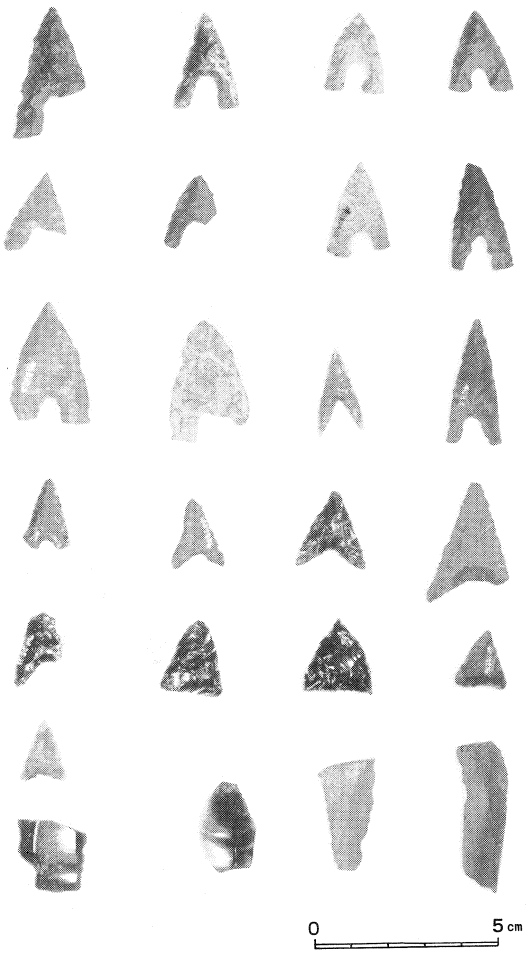
2．剥片および砕(屑)片



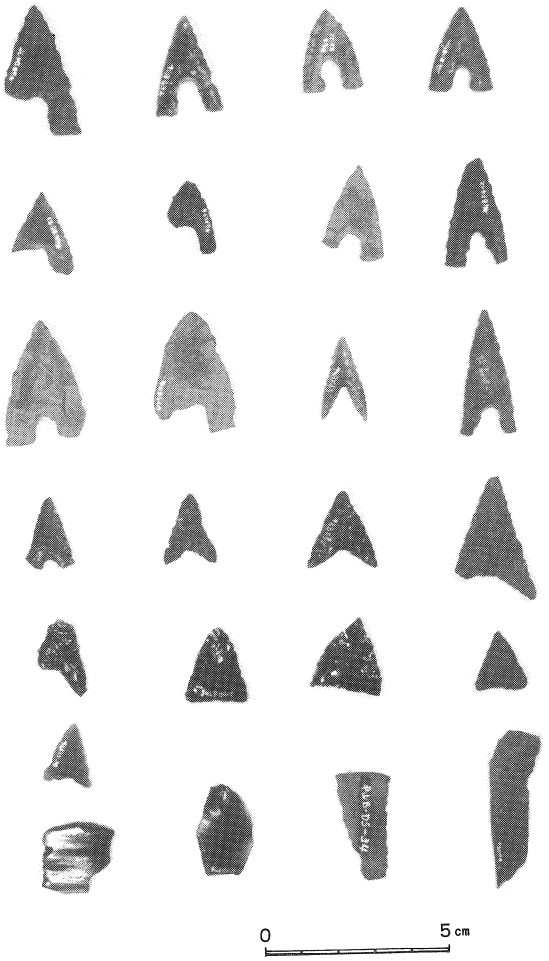
1．削器ほか（正面）



2．同（背面）



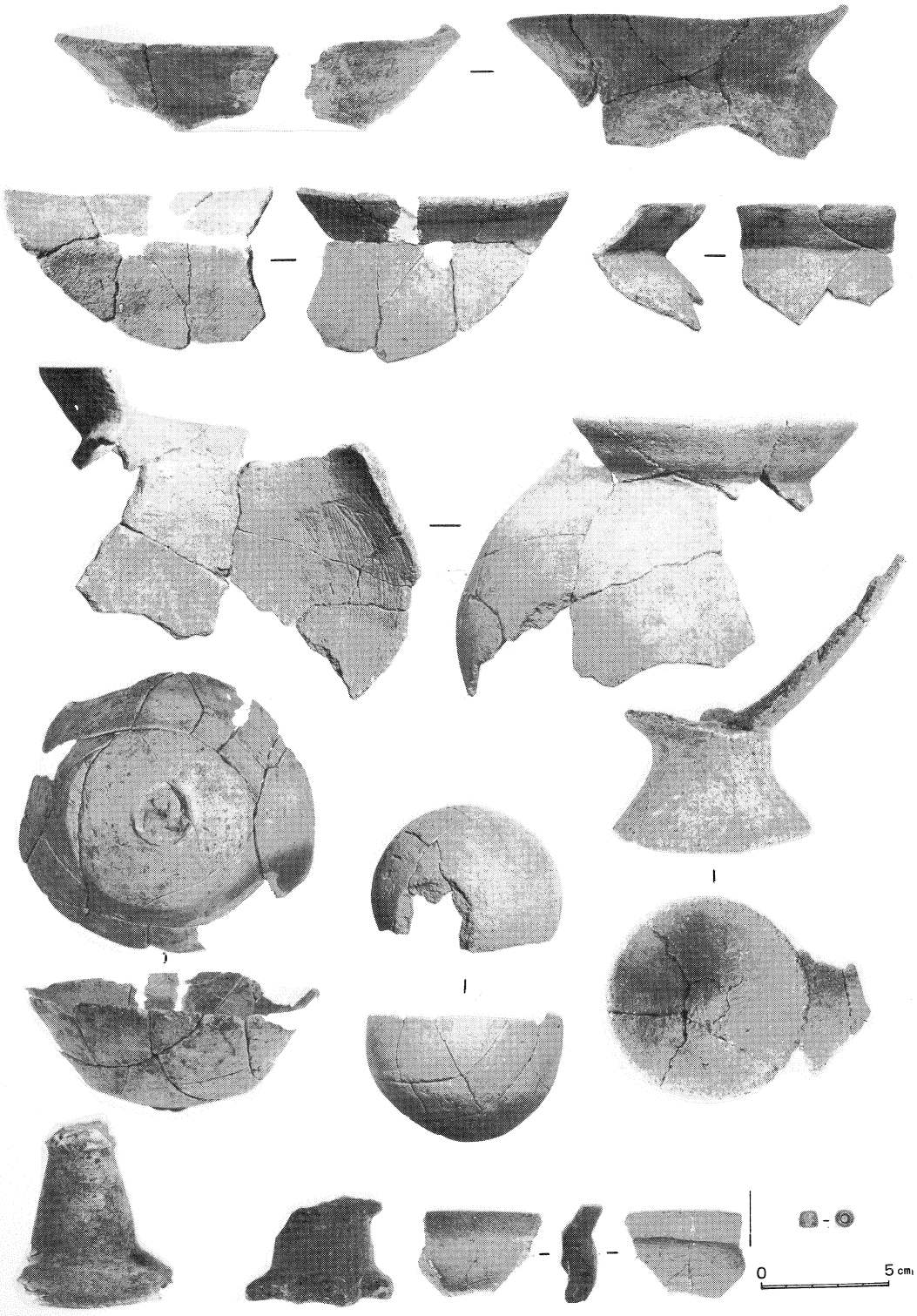
1．石鏃，ｕ－ｆほか（正面）



2．同（背面）

1．二次加工のある石器ほか（正面）

2．同（背面）



土器および小玉

諫早市文化財調査報告書 第３集

平山遺跡Ｂ地点

昭和56年３月31日

文化振興課

発行所　諫早市教育委員会
諫早市東小路町１番地
印刷所　諫早印刷株式会社
諫早市天満町81番地